DRAKKHEN™

Novel

by Francois Marcela Froideval

Illustrations by Olivier Ledroit

アナク・ドラッケン

それは幾度となく太陽に焼かれ
それは幾度となく月光を浴びた
それは光の主
それは影の主
それは宇宙の主
それは父の涙

それは四
それは四
それは二かける四
それは八
それは八
それは二かける八

眠っているのか
それは死の眠り
姿似たるものの吐息より
幻覚が生まれたり

（地を這うものの書より）

ハズル・メクトル
“予言”

最後が倒れ、後が途絶えしとき
すべては変わり、変わらぬものなし
高慢と蛮行を
勇気と自賛せる愚人
我が最後の息子を斬殺せん
その日こそ、森羅万象の終焉
理由なき混戦
戻る鞘なき剣
秩序は土くれのごときに価値を失い
風に舞わん

そこに至りて、いかなる希望ありや

アグナイール・ハースト
根源の父
“初源のドラゴン”

「世界は一日や七日にして創られたものにあらずして、
滝のごとく噴きつける火炎によりて
すべての土地に
命と、知識と、権力が吐き散らかされたものなり」

異端者カントレイスの言葉より

「大蛇が大蛇を食い尽くさぬかぎり
彼はドラゴンにはなれぬ」

古代の格言

「4つのエレメントが宇宙を構成し
2つの極が4つのエレメントを支配する
8つの原理が全体より派生し
全体は不死身である」

大魔道士
メスラトン

The Paladin
武者

これまでたどってきた道が、すべて見当違いであったと武者が気付いたのは、旅に出て、もうずいぶん経ってからのことだった。禁断の魔法の書物をひもといたこともあった。老人の埃臭い知識を求めて地の果てをさまよったこともあった。仕舞いには、すえた臭いのする僻地の酒場で、旅人たちにまずいワインを振舞ったりもした。

そしてようやく、今度こそ確実と思われる情報を手に入れた彼は、あり金をはたいて一番上等な馬を買い、それにまたがった。銀の鎧を着け、剣を腰に差し、槍を握り、多くの従者をしたがえ、正義感を燃え上がらせて東に向かって最後の旅に出たのであった。

旅は思いのほか長かった。いくつもの海を越え、川を渡り、砂漠を歩き、暗い森を抜け、奇怪な国々を通過した。出発してから何年経ったろうか。それでも、武者は信念を曲げず、引き返そうなどとは微塵も思わなかった。

ひとり、またひとりと、従者が倒れていった。最後に残ったのは、主人に負けず劣らず岩のような意志を持つひとりだけとなってしまった。

７年間に及ぶ執念の冒険の末、２人は、この世で最も遠いと思われる所までたどり着いた。そこは、ネゼニアと呼ばれるこの世の地獄。荒涼とした大地が、虚空に吸い込まれる境界線の国である。

武者はここへ来て、初めて笑顔を見せた。

ここは、まばらに植物が地を這う、石の多い砂漠地帯。苦しむためだけに生きている植物たちの、呪いの呻きが聞こえてきそうだ。腹をすかせた動物たちも、卑屈に尾を股に挟み、久しぶりに目にする獲物に飛びかかる気力もなく、遠くから様子を伺うだけである。しかし武者には、前方にそびえる切り立った山しか目に入らなかった。割れたガラスのようにギザギザにとがった頂上を見つめていると、そのまま空に吸い込まれそうになる。何かを警告するような気味の悪い風が、２人を押し戻そうと吹き荒れた。従者の体に震えが走り出した。

夜。一行は山の麓に到着した。従者から、シールドとヘビーソードを受け取り、邪教の神に祈り、己の魂をあずけると、武者は山頂を目指して岩に手をかけた。震えの止まらない従者も、しかたなく彼に続いた。

切り立った岩肌を、２人は這い上がった。すると間もなく、広く平なところに出た。そこは、大きな岩の裂け目の入り口であった。いかなる巨人でも悠々暮せそうな、巨大な洞窟だ。洞窟に足を踏み入れ、漆黒の闇に鼻面をくっつけると、長らく眠っていた武者の動物的な闘争心が目を覚ました。唸る風が、武者の挑発の叫びを闇の外へ押し戻す。声は岩肌に反響し、幽霊のように２人につきまとった。奥に進むにつれ、爬虫類特有の生臭い匂いが、重い風の中に感じられるようになってきた。足元には、巨大な蛇の抜けがらのようなものがあり、無数の潰れた鎧や白骨が、その下に見え隠れしている。

闇の奥から、低く長く伸びる唸り声が響いてきた。それは、夜の遠雷のように、あたりの空気を鈍く振動させ、

岩を共鳴させた。生き物がいる！　武者は足を速めた。ずるずると、何か大きなものが体を引きずる音がした。ゆっくり目をあげる。このときばかりは、恐れ知らぬ歴戦の勇者の心臓も縮み上がった。林立する石筍の向うに見えたのは、赤い空間の裂け目のような大きな口。これぞ、この世で最後のドラッケン。ドラゴン王族の唯一の生き残りだ！

頭だけでも、幅が5メートルはある。目は、人間の子供がひとり入ってしまう程の大きさだ。歯は剣のように長く鋭い。いきなり、強い匂いと閃光を伴った炎の奔流が、その巨大な口からほとばしった。

武者は慌てて飛び下がった。ドラゴンの大木のような体が、石筍の壁を踏み潰し、押し迫ってきた。尾が武者を狙って振り下ろされる。ほんの僅かな差で勇者はそれを交わすと、勢い余った尾は、固い岩盤でできた洞窟の地面を叩き崩した。ドラゴンが翼を広げた。武者はあらためて恐怖を実感した。その幅は、ゆうに30メートルを越えていたろう。

また、ドラゴンの喉から雷鳴が轟いた。長い首をくねらせ、大きな頭を前方に投げ出すと、逃げまどう武者めがけて、煙と炎の柱を吐きかけた。またしても、武者が攻撃をかわす。これが、ドラゴンを一層怒らせてしまったようだ。

煙でむせかえる洞窟から転げ出て、武者は振り返った。そこでは、従者が岩の陰に隠れて、ピクリとも動かずにいた。武者に続いて、途方もなく大きな生き物が洞窟からはい出してきた。山全体が、ドラゴンの怒りで震えている。ドラゴンは、石のように硬直した従者を見つけるなり、そちらに向かって口を開けた。従者は逃げることもできず、かろうじて強烈な炎の舌が自分に向けて突き進んでくるのを見ただけだった。ドラゴンが口を閉じ炎を飲み込むと同時に、従者の悲鳴も途絶え、あたりが一瞬、静寂に包まれた。

ドラゴンは後ろ足で立ち上がると、天に向かって首を伸ばし、耳を聾する勝利の雄叫びをあげた。武者は、このときとばかりにドラゴンに駆け寄り、下腹に剣を突き立てた。雄叫びが止まった。武者は、腹から吹き出した燃えるように熱い血しぶきを、体全体に浴びた。これが、古くから不死の秘薬とされてきたドラゴンの血なのか。しかし、武者は伝説の秘薬などに構っている余裕はなかった。ドラゴンにとって、剣のひとつきなどは、とげが刺さった程度にしか感じられない。ついに巨大な身をくねらせ、伝説の巨獣は本格的な攻撃態勢をとった。それは不気味な死のダンスのようでもあった。武者は、ひっきりなしに打ち下ろされるドラゴンの尾の間隙をぬって、矢のように突撃を繰り返した。ドラゴンの猛攻撃によって、あたりの岩が打ち砕かれ、土煙と、飛び交う岩石のかけらで、前も見えないほどになってしまった。

武者は斬りつけた。何度も何度も斬りつけた。しかし剣は、厚く頑強なドラゴンの皮膚に、辛うじて傷をつける程度であった。まったく勝ち目がないことは、武者にもわかっていた。

ドラゴンは、怒りの怪物と化していた。地上最強の動物の中でも最も強い最後にして最大の存在が怒りに狂い、四肢の爪で宙を掻きむしり、牙を鳴らし、尾で地面を打ちまくり、炎を吐き散らす。いったい誰が、これに近付こうなどと思うものか。だが、武者はドラゴンに駆け寄った。あたりの草木は燃え盛り、岩も熔けんばかりの焼熱地獄から逃れるには、ドラゴンの体の下に潜り込むしかなかったからだ。

何時間、戦いは続いただろうか。武者は、どろりとしたドラゴンの血で全身が濡れていた。炎に焼かれ、幾度となく爪と尾に打ちのめされた体は、焦げたボロ切れのようになってしまっていた。ドラゴンにも、疲労の色が見えてきた。ちょっと体を動かすだけでも、体中の傷から貴重な体液が吹き出すようにまでなっていたのだ。火山のように吐き出されていた炎は、もう数時間まえに枯れてしまっていた。口からは、しわがれた吐息が洩れ出るのみである。巨大な翼と尾に満ちていた威風はすでになく、だらりとして動かない。ドラゴンの目に驚異の表情が浮かんだ。ドラゴンが何かに驚くなどということは、この世界が始まって以来、初めてのことに違いない。ついにドラゴンは、炭と血で赤黒い泥沼と化した地面に崩れ落ちた。それと入れ替わるように、武者が立ち上がった。息をするのがやっとの状態ながら、血と脂がしたたる剣を杖にして、武者は泥沼に足を立てた。かたわらには、熔けてねじれたシールドの残骸が、血の海に湯気を立てている。目と目が合った。このとき、互いが死力を尽くして戦った相手の体力と精神力に驚き、威敬の念を交わしたのであった。

武者は歩き出した。そして、ドラゴンの山のような頭部に登り、剣を高々と振り上げた。ドラゴンは、この男に深い永遠の友情のようなものを感じていた。できることなら声を出して、ひとこと挨拶したいと思っていた。しかし、そうする前に、武者が勢いつけて突き下ろした剣が、ドラゴンの喉を引き裂いた。

ドラゴンが吠えた。血が噴流となって吹き出し、命の体液を地面にまき散らした。その勢いは、武者の手から剣をもぎ取り、遠くへ吹き飛ばす程だった。ドラゴンは、最後の力をふりしぼり、翼を広げて、よじ登るようにして空に飛び上がった。風の唸りのなかに、痛恨の叫びがこだまする。それは山の上空に輪を描きながら高く登り、人間がこの世に現われるずっと以前の遥かな昔より、縄張としていた広大な大地に最後の別れを告げたのだ。

ドラゴンはしばらく輪を描いていた。下界では、砂粒のような武者が、このまま永遠に飛び続けるのだろうかと、じっとそれを見守っている。しかし、ドラゴンの目は、決して晴れることのない死のかすみによって、もうほとんど見えなくなっていた。旋回が終わった。ドラゴンは次第に高度を下げ、そのまま真っ直ぐに降下を始めた。そのときドラゴンは、高空に漂う冷たい気流の中に、断末魔の言葉を残していった。

「アナク・ドラッケン・アグナイール・ハースト!」

ドラゴンの巨体は、火山の燃え盛る溶岩溜の中に墜落した。炎のしぶきが、赤い柱のように天に伸びる。最後のドラゴンにはプライドがあった。魂が体から離れても、その肉体がはく製にされ、ハンターのトロフィールームに他の獲物と並べられるような屈辱に甘んずることは、決して許されることではなかったのだ。

戦いのさ中では、感じる余裕もなかった激しい痛みが、じわじわと体にわいてきた。武者は、その場の布きれを拾って傷に巻きつけ、できる限りの応急処置をほどこして、ドラゴンの飛行を見守っていた。ドラゴンが炎の湖に落下したそのとき、世界全体が揺れ動くような鈍い衝撃が、空気を通して伝わってきた。それは、ドラゴンを失った悲しみに、世界が泣いているようにも感じられた。武者の心には、言い知れぬ罪悪感が満ちるのであった。グリフィンの月の10日のことであった。

ドラゴンの宝は、虹色の宝石ひとつだけだった。武者はそれを大切に懐に収めると、再び、長く厳しい道をひとり戻っていった。

町に帰ってみると、港に帝国海軍の軍艦が停泊していた。それが自分を迎えるための船であると知って、武者は少なからず驚いた。しかし、さらに驚いたことは、乗船したとたんに、兵士に囲まれ、無数のハルバードの矛先を向けられたときだった。

思ったよりもずっと早く、船は皇帝の宮廷がある町の港に入った。武者は、暗い船倉から引きずり出され、船首に連れてこられた。外の光に目が慣れて、武者の目に真っ先に飛び込んできたのは、宮廷の上に造られた灯台の、決して消えることのない永遠の灯火であった。諸国から訪れる船舶は、この光を見て、ここが世界一大きな港であることを、あらためて知るのである。

武者は埠頭に投げ出された。ブラックガードと呼ばれる宮廷護衛軍の分隊に宮廷まで連行される間、彼は、その人格をまるで無視された。ブラックガードによる彼の扱いは、もはや騎士に対するものではなく、奴隷に対するものであった。

皇帝は、苦々しく、また、理解しがたいという思いで武者を見つめた。王座の周りには、諸国の領主たちと、宮廷魔道士たちが立ち並んでいる。武者は、突っ立ったまま、最も基本的な法廷のしきたりをも無視し、無礼にも、皇帝陛下に向かって自ら話しを始めた。

「陛下、自分は、最後のドラゴンを倒し……」

ここまで言うと、衛兵が剣の柄で彼を押さえ込み、黙らせた。大魔道士が、武者の後をとって続けた。

「うぬぼれと無知から、とんでもない間違いを犯し、この世界の運命を、断末魔の苦悶へと導いてしまいました。それればかりでなく、自分が得意になってドラゴンを殺害したことは、この世界への反逆行為であります。自分は、陛下にお仕えする者として、この上ない誇りを抱いております。陛下を心より尊敬いたしておりますゆえ、なにとぞ、褒美を頂きとう存じます」

大魔道士は皇帝に向き直って言った。

「有罪を申し立てます」

そして次々に、皇帝のもとに召集された領主たちが意見を述べていった。彼らの意見は、ひとつの異議もなく、完全に有罪とのことだった。全員が皇帝に注目した。少しの沈黙をおいて、皇帝が判決を下した。その言葉は、武者の心に冷たい衝撃を突き刺した。

「有罪だ。絞首場に引き立てろ。絞首刑でもこの男の体に命が残っているようなら、水に漬けて、体を4つに切り裂き、野良犬にくれてやれ」
　皇帝の命令は、すべて、すみやかに実行された。ただひとつ、皇帝の命令に従わなかったのは、野良犬どもだった。切り刻まれた武者の肉には、目もくれなかったのである。
　こうして、最後のドラゴンを倒した武者は処刑された。ドラゴンの月の12日のことであった。その日、諸国の領主たちと、大魔道士たち、それに、高僧たちがランドスラード会議に召集された。会議は、外部との交流を一切絶っての密談であった。それは7日間続いた。7日目にしてやっと会議室の扉が開き、メンバーが引き上げていった。
　8日目に、4人の人間が皇帝の元に参上した。帝国の各地から、領主たちの命によって集められた者たちである。
　この日のことは、その4人のひとりである貴殿が、よくご存知であろう。

テネブレ133年、グリフィンの月の10日
バール・アール・アン・ジュルジャン・フォン・ウェッセンマイヤール

10th day of the month of the Griffin anno Tenebrae 133
Vhal Hart Hann Jurgen von Wessenmayer

私の名の最初の部分は、私が唯一絶対の神に仕える大僧正であることを表わし、2番目の部分は、私がこの帝国で最も古い家の出身であることを表わしている。
私はこれまで、帝国に対する忠誠と誇りを、ひとときたりとも忘れたことがなかった。しかし、私が第一に忠誠を誓ったのは、神である。唯一絶対の神である。私が身につけている青いローブは、神の御力を象徴するものだ。私は宮廷寺院に務めている。この上なく光栄なことだ。そんな私も、ずっと昔は町の人間だった。
私は、人生の残る3分の1を神に捧げようと決心した。そして、この城壁の内側で、しだいに私自身を、空虚な俗事や、止むことのない権力の争いなどから隔離していったのである。

「魔法が消えた！」こんなニュースが私の耳に入ったとき、私の驚きたるや尋常ではなかった。これが単なる悪質な噂であればと願う私に追い打ちをかけたのが、大魔道士が直々に私に会見を求めてやってきたことだった。これによって、この噂が真実であることが証明されてしまったからだ。
私は即座に大魔道士を招きいれた。断わったところで、すごすご帰るような男ではない。普段は聖職者然として滅多に表情を見せない彼の顔も、このときばかりは、不安で蒼白になり、左の目ぶたを、しきりに痙攣させていた。彼は、私が薦めても、なかなか腰を下ろそうとしなかった。むしろ、それどころではないといった様子で、私に言葉をぶつけてきた。
「ジュルジャン」世界で私のことを名前で呼べる人間は3人しかいないが、彼はそのひとりだった。
「古代のチンの詩を覚えているか。最後のドラゴンが死ぬと、それが起こると……」
「もちろんだ。『魔法は消える』だろ」
「それだそれだ。それが今まさに、やってきているんだ。どこかの武者が最後のドラゴンを殺してしまうという光景を透視したんだ。それが最後だった。それで、私の魔法は終わってしまった」
「もうとうの昔に、ドラゴンは絶滅しているはずじゃないのか」
「そうだ。1頭だけ残してな。それも、恐ろしく強く丈夫なドラゴンであったから、わしらも安心していたんだ。だから、その保護も形式的なものにすぎなかった。ドラゴンを殺そうと企む人間がいたなんて、誰も考えやせんよ」
「そんなドラゴンがいたとは、初耳だ」
確かに、私はそんな話は聞いたことがなかった。
「その存在を秘密にしておくのも、保護の一貫だったのだ。お恥ずかしい話だが、我等は、チンの詩が真実を語っていたとは、実のところ、信じてはおらなんだ」
「それで、この私に何をしろと言うのだ」
「御託宣だ。神の御託宣を頂きたい。魔法が消えてしまったら、大変なことになる。この世界は、魔法の上に成り立っているようなものだからな。すでに、疫病が世界に蔓延しつつある。そうなりゃ、誰も生き残れはせんぞ。頼む。この惨めな宮廷大魔道士のお願いだ。聞いてやってくれ」
彼の声は、力なく消え入りそうだった。目は絶望の虚空を見つめて動かない。私は、彼を慰めると同時に力付けてやるために、彼の依頼に太鼓判を押してやった。私が必ずなんとかしてみせる。必ず解決策があるはずだと言い聞かせ、少し休むように言ってやった。彼は曲った指で後手にドアを閉め、私に計り知れない重荷を残して、部屋を去った。さっそく私は、最も厳粛な儀式のための祭礼服に着替え、急遽召集した僧正たちを引き連れて、至聖の場所に向かった。

日にちが経つにつれ、世の中の混乱ぶりが目に見えるようになってきた。宮廷は人の出入りが激しくなり、各地からの災害の知らせなどでごった返した。なかには、こんな報告もあった。歩兵部隊がひとつ、普段なら難なく撃

退できるはずの蛮人の集団に襲われて全滅した。部隊の戦力は、大半が魔法に頼っていたのだが、そのときは、まるで魔法が使えなくなってしまったのだと言う。こんな報告もある。暴風雨にさらされた船舶が、消息を絶った。その程度の嵐で船が行方不明になるなど、これまでなら考えられないことだったが、風向きや天候のコントロールを司どる風魔法官が、船を防護する魔法がかけられなくなってしまったため、こんなことになってしまったらしい。宮廷も傍観者ではいられなかった。魔法の力を借りて建設された壮大な建造物が崩れ落ち、瓦礫と化してしまったのだ。

世界中が我々の頭の上に崩れ落ちてきたようだ。私の憂慮をよそに、皇帝陛下は、解決策はきっと見つかると、悠然としていらっしゃる。私には、解決の目途はまったく立っていなかった。それなのに、皇帝があんなに落ち着いていらっしゃるのはどうしてだろう。神から陛下へ、直接なにかの啓示があったのだろうか。いや、そうではない。陛下はお立場上、このような事態において、陛下として、とるべき態度とおとりになっていらっしゃるにすぎないのだ。こういうときこそ、落ち着いて判断を下し、適格な命令を言い渡す。魔法を使わずに世界を再建する。それが、今、陛下がなさるべきことなのだ。

神は沈黙を守ったままだった。世界の破滅を、一時でも止めることができるようなものは、もう何も存在しない。そう思われた。絶望した魔法使いの中には、自らの命を絶つ者も出た。しかし、自殺した者よりも、殺された魔法使いのほうが、はるかに数が多かった。うろたえた群衆が、この災害はすべて魔法使いの反逆によるものと思い込み、魔法使いを虐殺して回ったのだ。魔法使いに恨みを持つ者たちは、このときとばかり、復讐を開始した。そして、ある魔法使いの暴君は、７世代にわたって冷遇され続けてきた奴隷たちに処刑された。

魔法使いばかりではない。最後のドラッケンが殺された日から、我々僧侶も、法力を失ってしまったのだ。私はすべての呪文を失った。神はただ、沈黙を守られるのみ。それでも、我々は、陛下同様に、立場上、平然とした顔を装っていなければならなかった。皇帝陛下は、私にそうするよう強く望まれ、あることを教えてくれた。力のスクロールなどの、魔法用具は、いまだに法力を備えているというのだ。これを使えば、一般市民たちは、聖職者にはまだ力があると信じるだろう。陛下の沈着さは驚嘆に値する。大嵐の中でも、陛下には、すべてがお見通しのようだ。

ドラゴンの月の７日、午後。行方不明になったまま絶望とされていたソル・コム１帝国商艦シャダークが帰ってきた。船体のところどころが焼けたように黒ずみ、破損も著しい。よく浮かんでいられると思うほどの変わり果てた姿での帰還だった。港にいた船員や港湾労働者たちは、大きな拍手と喚声でシャダークを迎えた。そのときの喚声は、宮廷の一番高い塔でも聞こえたほどだ。船長が殉死したあと、風魔法官が船の指揮をとっていたようだ。私は宮廷のバルコニーから、ブラックガードが出動して船を取り囲む様子を伺っていた。すると間もなく、ブラックガードの間から、ゴールドガードに守られて、風魔法官が現われ、宮廷に向かって歩いてくるではないか。

私は、私の威厳が損われない程度に大慌てで皇帝陛下の王座の間に駆け込んだ。風魔法官のような一介の魔法使いが、あれほどの手厚い待遇を受けているのを見て、私は絶対に何かあると感じたのだ。どうしても、それが知りたかった。シャダークは、重要な秘密任務についていたに違いないのだ。

私が王座の間への入室が許されたのは、入口を護衛していた近衛兵のひとりが、ひどい苦痛を伴って床に倒れた直後だった。他の護衛たちは、同僚が床に倒れるのを見ると、いつになく素直に私に入室の許可を与えてくれた。つまりその、私は、融通のきかない衛兵に会うと、どうしても我慢ができなくなって、強行手段をとってしまうのだ。

皇帝陛下のおそばに、ひとりの男が立っていた。後にも先にも、これほど変わった謁見者を、私は見たことがない。シャダークの風魔法官だ。彼は、奇想天外な航海の概要を陛下に報告すると、シャダークの航海日誌を陛下に献上した。そして、航海の詳しい内容については、その男と陛下以外の誰の耳にも、決して入れてはならぬと陛下に申し上げた。この部屋に集まった聖職者たちは、口には出さないものの、一同に不平の表情をあらわにしていた。陛下は、そんな我々全員に、少し済まなそうなお顔をされ、席を外すよう命令された。

それから数日たったドラゴンの月の９日。大きな帝国海軍の軍艦が、他の船を威圧するように入港してきた。なんともいかがわしい積荷を積んで。そう、最後のドラゴンを殺害した、例の武者を連れてきたのだ。武者はブラックガードに連行され、皇帝陛下の御前に引きずり出されたときには、すでに彼の運命は決まっていた。

この仏のような私ですら、彼に死刑を求刑したのだ。己の身勝手な欲のために世界に反逆した罪は、どのような

極刑をもってしても、償うことは叶わない。ドラゴンの月の12日、この男の首は、掃きだめに投げ捨てられた。
その直後、皇帝陛下はランドスラード会議を召集された。これは、諸国の領主や王を集めて行なわれる、最も権威ある会議だ。もちろん、私も出席した。この伝統の会議で話しあわれた内容は、決して他言しないしきたりになっている。だから、この７日間に及ぶ討議で驚くべき計画が立てられ、それに世界の運命を委ねることが決定するまでの過程において、何が提案され、何が否決されたかなどの、詳しい説明は避けるとする。
この計画の実行には、４人の勇敢な人間が必要だった。そのひとりにと私が立候補すると、なんと意外なことに、すんなりと承認されてしまった。私は物事をあまり深く考えるのが苦手であるため適任だと思ったのか、私のことを快く思っていない者までも、私の申し出に賛成してくれたのだ。残る３人は、公募によって集まった世界の英雄の中の英雄から厳選され、召集がかけられた。

翌日、朝の礼拝が済んで数時間後、私は鋼鉄の戦闘用ローブに着替え、適当な武器を取ると、王座の間に向かった。そこで私は、世界で最も高名な３人の勇者たちに面会したのだ。
我々４人は、枢密院の間に案内された。そこにはすでに、皇帝陛下と大魔道士が私たちを待ちうけていて、我々は陛下から、ソル・コム１帝国商艦シャダークの奇怪な航海の話を聞かされた。
後に、陛下は私に、シャダークの航海日誌を下された。これはその後、複製が作られている。

Sol com 1 HMS Shadrak
ソル・コム1 帝国商艦 シャダーク

ソル・コム1（第1級商艦）の美しく威厳に満ちたスタイルは、まさに帝国の絶大なる権力の象徴と言える。事実、軍艦と並んでも、その名前を見るまでは、これが商船であると気がつく者は少ないであろう。

その巨大な船体には、豊かな帝国の産物を舷縁まで積載することが可能で、しかもその上に、多数の乗客を乗せることができる。

耐波性に優れた形もさることながら、その構造は、陸の要塞にも匹敵する強度を誇る。船体構造ばかりではない。ソル・コム1には、常に海戦の特殊訓練を受けた精鋭100名からなるシーハウンド部隊を3部隊乗船させることになっており、象徴的に船首に輝く鋼鉄製の衝角をはじめとする、最新の対艦兵器も、多数装備している。

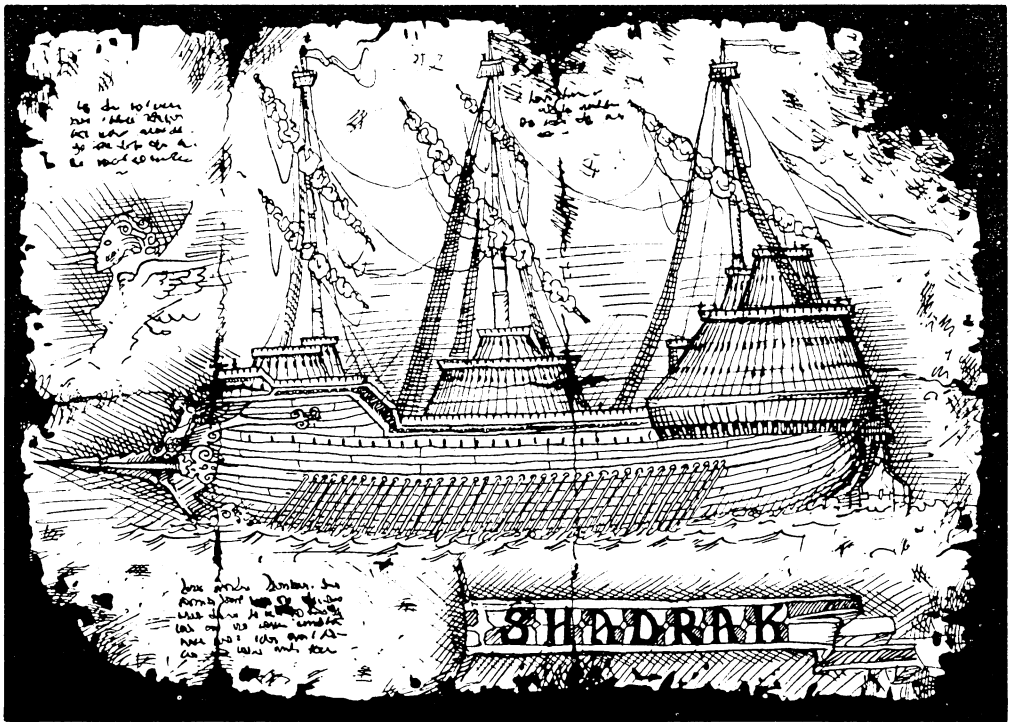
この艦の安全対策は、これは止まらない。ソル・コム1の運航の規定に、必ず護衛の高速艦を数隻伴わなければならないと定められているのである。そして、必ず1人の風魔法官の乗船が義務付けられていて、常に適性な風の元に航海できるよう計られている。

もちろん、乗組員は経験豊かな超一流の人間によって構成されている。ソル・コム1が帝国の誇る最高級艦船であることは、これでおわかり頂けただろう。ちなみに、港の労働者たちは、気取った人間を揶揄するときに、こんな言い方をする。

「クジラ丸の船長みてぇに、お高くとまりやがって」

クジラ丸とは、ソル・コム1のニックネームである。

ソル・コム1リン級 帝国商艦 シャダーク諸元表

全　長　：122メートル
全　幅　：23メートル
マスト数：3本
オール形式：2列
乗員数　：乗組員150名・櫂奴隷800名・艦護衛兵300名
乗客数　：50～100名
弩　砲　：10門
弾　弓　：20門
重石弓　：100門

Log of the Shadrak
シャダーク航海日誌
第1級帝国商艦

テネブレ133年、グリフィンの月、10日

護衛艦船、海賊戦追撃のため旋回し、本艦を離れる。1時間以内に本艦に合流の予定。

風魔法官より、憂慮すべき報告あり。風向制御の呪文が効力を失ったとのこと。それにより、本艦は、帆走不能の状態に陥る。風魔法官は、すでに、いかなる呪文も使用不可能になったとのこと。

奴隷長に櫂航行を命ず。しかし、速力上がらず。

正午

護衛艦、合流せず。護衛艦も本艦同様、帆走不能の状態と推測せり。奴隷長の尽力にもかかわらず、潮流強く、本艦は航路を外れ北に流される。

風魔法官、体調思わしくなく、船室にて休養を命ず。

テネブレ133年、グリフィンの月、11日

本艦、夜を通して漂流す。

護衛艦は、今後も合流の見通しなしと見なす。海賊の奇襲に備え、全艦に戦闘準備を命ずる。護衛兵の3分の1を、常に戦闘配置につける。

奴隷の疲労、極限に達す。数時間漕ぎ続けるも、強い潮流に逆らい積載物満載の本艦を航行させるは、困難至極なり。これ以上の労働は、奴隷の生命に危険が及ぶと判断し、奴隷に休息を命ず。

風魔法官、いまだ船室より現われず。昨日より、一切の食事をとっていないとの報告を受ける。重病と判断す。本日も漂流を続ける。

テネブレ133年、グリフィンの月、12日

2晩目の漂流。潮は波もなく、本艦を北へ流し続ける。すでに、海図に記された範囲を越える。

舵手と言葉を交わす。舵手も、このような潮流は初めてとのこと。

乗組員に疲労が増す。この事態はすべて、風魔法官が呪われたためとの流言を聞く。乗組員の精神状態が懸念される。幸い、乗客に僧侶あり。かかる迷信的流言を一笑に付す。乗組員に、多少なりとも安堵感を与えたものと期待する。

正午

風魔法官を船室に見舞う。風魔法官、泥酔状態にあり。しかし、精神状態は幾分落ち着いた模様。この日も、懸念したとおり、風はなく、ひたすら北へ流され終わる。

テネブレ133年、グリフィンの月、13日

我々は、神の玩具として、もてあそばれているのであろうか。護衛艦も、風も、魔法もない。あるのはただ、このいまいましい潮流のみ。

全身全霊を込めて本艦を漕ぐよう、奴隷に命ず。いちかばちか、この終わりなき潮流からの脱出に賭ける。

８時間、最高ピッチで本艦を漕ぎ続けるものの、過労のため奴隷の死亡者が続出。状況を悪化せしめたることを悔む。

櫂走の中止を命ず。これ以上の生命を、無為に失うことは、本艦にとって大きな損害となる故なり。今後は、潮に艦を委ねる他はない。無駄な努力は、ただ消耗を促すのみ。

風魔法官と会食す。風魔法官の精神状態は、かなり持ち直されたものの、魔力は依然、消失されたるままとのこと。乗客に含まれる、各界の魔法使いたちも、同様に魔力を失っていたとの事実を、風魔法官より聞く。

風魔法官は、魔法の嵐に捕えられたのではないかとのこと意見を述べる。彼が、かかる否定的憶測に畏縮せるを見て、私は彼を解任す。この措置が、彼を落胆させ、一層否定的考えに走らせることになるならば、その時は、また策を考えることとする。ともあれ、強く前向きの精神を持たざる者、本艦における任務には不適任と確信するものなり。

漂流続く。

テネブレ133年、グリフィンの月、14日

漂流の速度衰えず。

午前11時数分前、右舷にクラーケン発見との報告あり。乗組員は一同に緊張せり。厳戒態勢を命じ、投石機と対艦爆薬の使用を許可す。

怪物は数時間にわたり、巨大な背に日光を反射しつつ、本艦と近距離を保つ。体長約90メートル。鱗には角状の突起あり。ときおり、我々を監視するかのごとく、巨大な頭部を海上にもたげる。口を閉じるたび、歯が雷鳴のごとき音を立てる。その醜悪なる吻部を見て、嘔吐する船員数名あり。

事態は深刻を極める。艦は潮に流されるまま身動きがとれず、300名の兵士、ある者は銛やクロスボウで武装し、あるものは重兵器の傍らに立ち、艦に沿って泳ぐ巨大な怪物と対峙す。怪物は、ただ泳ぐのみ。本艦に攻撃の意図はいまだ見られず。

午後５時、怪物は海上に頭を突き出し吠える。しかる後、もんどり打って海中に没す。怪物は、空高く水しぶきをあげ、深海の仲間の元へ帰還したるものと思われた。

その後１時間、攻撃態勢を維持するも、もはや危険なしと判断し、それを解除す。

怪物はシャダークの巨体を脅威に感じ、しばらく様子を伺いしものと推測す。もし攻撃を受けしものなれば、致命的損害もやむなきところ。

かかる異常事態においても、我が乗組員及び護衛兵士は、それぞれの任務を勇敢に果たしたること、賞賛に値す。

テネブレ133年、グリフィンの月、15日

早朝、見張り員を帆げたに吊るす。この者の職務怠慢により、本艦は座礁せり。よって、罰を与えたものなり。座礁時の衝撃で、私は寝台から投げ出された。さっそく高級航海士を召集。緊急会議を開く。本艦が座礁したる島、海図になきものにて、その存在を知る者なし。幸い、艦の損傷は軽度にて、数日の作業にて修復せんとの見通しあり。ともあれ、陸に到着したること、船員にはこの上なき喜びなり。

新鮮な飲料水確保のため、３艘のカッターを上陸させる。風魔法官も上陸隊に同行す。私は、艦の修復に費やされる数日間を利用した島の探索を提案す。

上陸隊、上質なる水を汲んで帰還す。湾には風雨に浸食された形跡がなく、まるで昨日出来上がった島であるかのようだと、風魔法官、大変に興奮し報告す。馬鹿げている。この男に対する私の不信は、さらに深いものとなる。魔法の力を失いしことが、彼の知性までも低下せしめたると判断す。

テネブレ133年、グリフィンの月、16日

兵士250名と乗組員20名から探険隊を組織す。乗客20名の有志からなる隊も結成されるも、乗客の隊に与える使命

が思い当らず、困惑す。乗客隊は、騎士十数名、僧侶１名、魔法使い２名の編成。魔法使いは、風魔法官同様、魔法の力を失っている。
全人員、装備、馬の上陸に２時間を費やす。出発から10分後、小さな川を越える。
私は、この探険に少なからず興奮を覚えた。もしや我々は、新大陸の発見者なのかも知れぬ。もしそうであれば、皇帝陛下が、この新世界の統治者として、私を任命されることも夢にあらず。
広大な平原に出る。豊かな緑におおわれし所なり。しかし、その植物は、隊の誰もが見たことのない未知の種類ばかりであった。上陸からここに至る間、我々はいかなる人間にも会わず。無人島である可能性、大なり。
遭遇した動物たちも変わっていた。鱗におおわれた小型の生物や、巨大な鳥。大型の動物が、しばらく我々を観察したる後に逃走するとの報告もあり。これだけの島ならば、様々な猛獣が棲めるのも自然の理なり。
日没、野営の準備にかかる。危険な動物を避けるため、灯火にてキャンプを取り囲む。この地域の樹木は、樹脂分を多く含み、よく燃える。
兵士のひとり、非常に興味深き事実を発見す。樹木の断面に、普通ならあるはずの年輪が見当たらないのである。まさに未発見の新種なり。
夜の気温は低く、肌を刺す。シャダークが数日間、北へ流されたることを考慮すれば、当然のことなり。空は晴れ、星、多し。私の興奮は続いていた。しかし、少々疲労蓄積の感あり。星座が動いて見える。

テネブレ133年、グリフィンの月、17日

深夜、悲鳴を聞く。２名の兵士が行方不明とわかる。翼のある巨大生物が、２名をさらったとの目撃者の報告あり。歩哨を倍に増やす。
その後、夜は何事もなく過ぎる。
午前９時、出発。さらに北へ進む。
夕方までに、かなりの距離を進むことができた。途中、不幸な事故あり。５名の隊員が食肉性巨大植物の餌食となる。私はずっと、何者かに空から見られているような気がしてならない。２名の魔法使いも、私同様の感覚を覚えたるとのこと。彼らは始終、空を観察せり。私も観察するも、何もなし。
けだし、ここはすばらしき土地なり。奇妙な動植物のためのみに存在するには、人類にとりて大いなる損失なり。誉高き帝国の領土とするにふさわしい、美しく肥沃な土地なり。水も澄み豊富で、味は極めて良好。ただし、僧侶から私に、持参した食糧以外は口にするべからずとの忠告あり。土地の果物を食して倒れし者、数名ありとのこと。
私は僧侶に忠告を感謝し、就寝の準備にかかる。今夜は、剣を抱いて寝ることにする。

テネブレ133年、グリフィンの月、18日

またも、激しい悲鳴に目を覚ます。私は剣を抜き、声の方へ駆けつけた。なんということか。兵士用テントのひとつが、中の哀れな兵士もろとも無残に引き裂かれ、押し潰されたる。体の一部分を持ち去られし兵士もあり。歩哨隊長の報告では、死亡または行方不明は12名にのぼるとのこと。
その後の捜索で、地面に無数の足跡が発見される。かなり巨大な生物の仕業であると推測される。騎士たちは大変に興奮し、いかにしてもその生物の首をとり、かたきを討たんと息を荒くせり。私は何も言わず、テントに引き返す。
朝、僧侶がひとり、行方不明になったとの報告を受ける。他の僧侶によると、彼は夜どおし星を観察いたしたる故、怪物に狙われたのであろうとのこと。騎士たちは地団駄を踏み悔しがった。彼らも夜を徹して警戒に当たりしも、まったく役に立たざるためなり。
今日、我々は初めて、敵を目の当たりにす。狂暴かつ巨大なる翼竜なり。兵士のひとりが、みごとにクロスボウにて射落としたるもの。
大きな谷に出る。そこで見たものは、畑と、たわわに実りし穀物なり。我が夢破れる。結局ここは、無人の島ではなかった。しかし、魔法使いによると、穀物は見たこともない種類であるとのこと。遠くに村あり。そちらに向かう。
村は人影なし。我々の侵入に驚き、慌てていずこかに避難したる後であろうか。かまどに残り火を確認す。
村よりさらに向う、立派な城伏の建造物あり。とにかく、あそこまで行けば、誰かに会えるものと期待する。

ここで、シャダークの航海日誌は終わっている。

この航海日誌を読んで感じたことは、この奇妙な島が、今、全世界を揺さぶっている危機の元凶ではないかということだ。
宮廷魔道士が、背の高い学者風の面構えをした男を案内してきた。あの男だ。かなり疲れているのは確かだが、その服装や態度から、なんとなく怪しいものが感じられて仕方がなかった。男は口を開いた。
「皆様、ご機嫌うるわしゅう。初めてお目にかかります。しかし私のことは、よくご存知のことと思います。私は、皆様がお読みになりました航海日誌にしばしば登場しておりました。シャダークの風魔法官、本人でございます」
この男が、このもったいぶった自己紹介をする前から、出席者は全員、彼の正体を知らされていた。にも関わらず、我々はつい、彼の計算どおり、驚きの声をあげてしまった。みな、謎の島のことを聞きたくて我慢できないといった様子だった。そこで、形式的な挨拶は省略し、みなの期待に応えてもらうことにした。男は椅子に腰を下ろし、話を始めたのである。

「上陸隊は、船長が見た城の方向に歩き始めました。そこで我々は、ついにこの島の住人と遭遇したのです。それは、船長の期待とは、まるでかけ離れた人々でした。騎士たちは、無意識に戦闘態勢を整えました。木の陰から、ドラゴンがこちらの様子を伺っていたのです」

風魔法官は、ため息をついた。それが、その後に続く話がいかに悲惨であるかを物語ってるようだった。
「騎士がドラゴンに突撃し、おぞましい戦いが始まりました。馬は怯えて暴れ出し、戦いの名乗りをあげる騎士に向かって、ドラゴンは真っ赤な炎を吐きかけました。刺激臭のある煙が立ち込め、我々からは戦いの様子は見えなくなりました。
兵士たちも黙ってはいなかった。咄嗟にみごとな隊列を組み、突進したのです。しかし、煙の中から突然現われたドラゴンの猛襲に、瞬く間に戦闘の数列がなぎ倒されて、無残にも隊列は目茶苦茶に踏み付けられてしまったのです。それでも、煤煙で真黒になりながら、背後からドラゴンにかかっていった騎士もいました」

魔法官は言葉を飲んだ。我々には想像もつかない恐ろしい光景を、心に思い起こしているのだろう。この先を続けるべきかどうか、彼は顔をあげ、我々ひとりひとりの顔を順繰りに眺め回した。こんなに恐ろしい話は聞いたことがないと、我々の顔に書いてあったのだろう。彼は深刻な顔でうなづいて見せた。しかしみな、早くその先が知りたかった。とりわけ、私には知っておく必要があった。我々の全員一致の意志を汲み取ると、魔法官は、話に戻った。

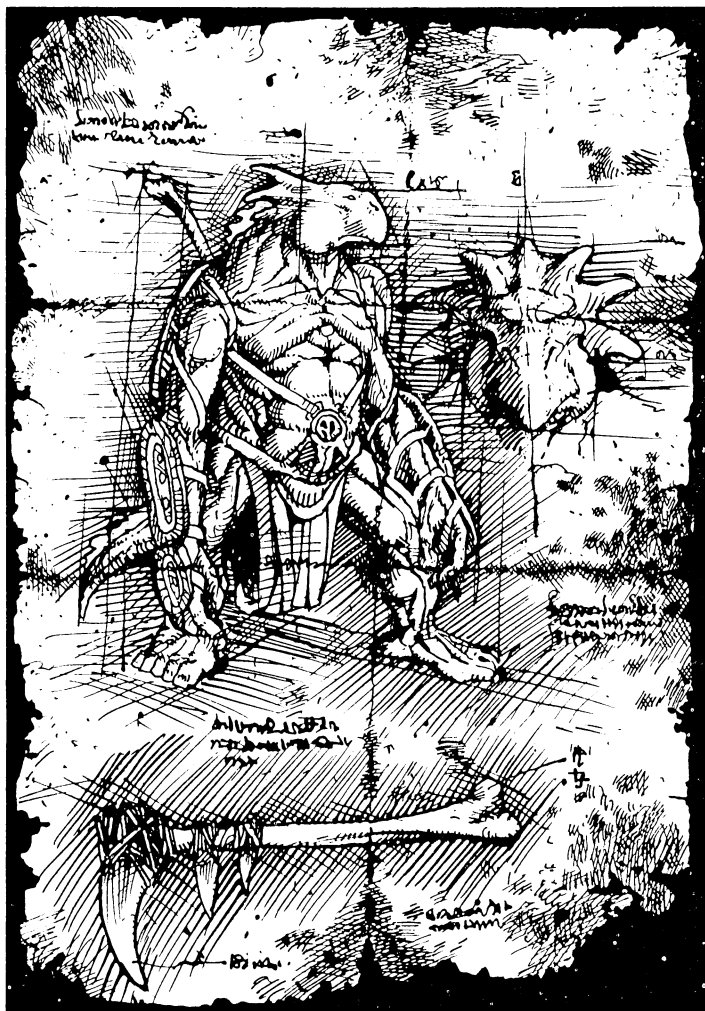
「これで我々も全滅かと思われたとき、城の大きく分厚い扉が開き、中から鎧に身を固めた兵士たちがなだれ出てきました。口々に、聞慣れない言葉を叫んで。船長と護衛の兵士たちは、この時を得た援軍の登場に感謝の意を伝えようと、飛び出していったのです。彼らの隊長とおぼしき者は、他の兵士に比べてひときわ背が高く、上等な装備を身につけていました。ドラゴンによる殺戮はまだ続いていましたが、これで、戦況は一転すると、みなは胸をなで下ろしたのです」

また風魔法官は、言葉を止めた。湯気の立っている茶碗から、熱いものを一口すすり、話を続けた。

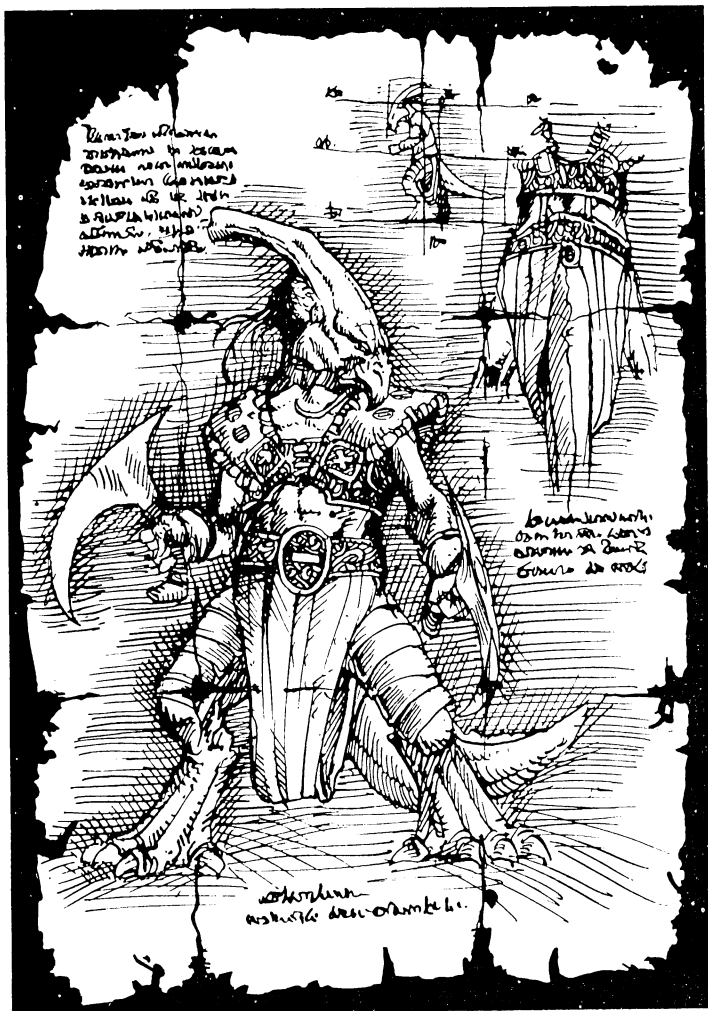
「だが、次の瞬間、援軍に駆け寄ろうとした我が護衛部隊は、何かに跳ね返されるように、慌てて引き返してきました。隊長も、血相を変えて戻ろうとしたのですが、他の兵士たちよりも重い装備をつけていた隊長の逃げ足は遅く、向うの隊長が、いやにギザギザした大きな剣を抜いたときは、まだそこを動けずにいました。あっと思う間もなく、剣が振り下ろされ、こちらの隊長の首が肩から斬り落とされてしまったのです！

この島に上陸してから、なんとなく、魔法の力が戻ってきているような気がしていた私は、隊長に何が起こったかが知りたかったのと、魔法の力を試すつもりで、ごく簡単な望遠の呪文を唱えてみました。呪文は成功し、真実がはっきりと見えたのです。城から出てきた兵士たちは、ドラゴンの顔をしているではありませんか！　隊長クラスの連中には翼もあり、まさしくドラゴンそのもの。しかし、我々の世界の伝説にあるものよりも遥かに小型で、

奇妙な金属製の鎧に身を包んでおりました。ヤツらは我が軍に襲いかかり、人間同士では考えられない残虐の限りを尽くしたのです。そのときは身を守るのが精一杯で、ヤツらに攻撃を加えることなど、誰の頭にもなかったでしょう」

　私は、選ばれた３人の勇者たちのほうを盗み見た。私と共に、間もなく危険きわまりない場所に送り込まれる彼らは、呆然自失の表情を浮かべていた。私も同じように、ポカンと口でも開けていたのだろう。宮廷魔道士のほうを見ると、彼は咳払いなどして、笑いを隠そうとしているところだった。ヤツは、我々４人が恐怖に怯える様を見て、楽しんでいるのだ。ヤツもこの残酷な物語を初めて聞いたときは、我々と同じ顔をしたに違いない。ヤツ自身も、それをわかっているからこそ、我々の反応が愉快でならないのだ。なんというヤツだ。私は身震いしたいところを必死に抑え、話に戻った風魔法官に向き直った。

「……城から出てきた兵士たちは、ドラゴンの顔をしているではありませんか！……ヤツらは我が軍に襲いかかり、人間同士では考えられない残虐の限りを尽くしたのです……」

「私は、私と並んで戦闘の様子を眺めている仲間たちに、急いで引き返すことを提案しました。このままでは敵に惨殺されるだけ。ここに留まっても、何の利益もないとわかったからです。ドラゴンの軍隊が、我が軍の隊列を1列、難なく踏み潰してしまったのをきっかけに、私たちは、一目散に走ってその場から逃げたのです。兵士たちは、まだ勇敢に戦いを続けていました。しかし、勝負は火を見るより明らかです。一番小柄なドラゴンでさえ、人間よりも頭ひとつ分は背が高いのですから。逃げる途中で私が見た最後の光景は、翼を広げ、鎧を輝かせて、城の窓という窓から飛び立ったドラゴンの大軍が、恐ろしい武器を振り回しながら、我が軍の兵士の頭上に襲いかかったところでした。

あの戦いで生き残った兵士から、その後の話を聞いたのですが、騎士が、なんとかドラゴンを1匹、倒したのだそうです。それを機に、ドラゴンへの反撃が始まりました。隊長は、残り少なくなった兵士を方陣に組み、クロスボウの一斉射撃を浴びせました。すると、ドラゴンの最前列が、草を刈るように、なぎ倒されたそうです。ドラゴ

「……彼らは、血も凍るような不気味な言葉を発していたそうです。それはまさしく、死の言葉でした……」

ンの隊長だけは、鋼鉄の矢にも傷ひとつ付かないようだったそうですが。さらに、ひとりの騎士が敵前に飛び出し、空から襲ってきた大柄なドラゴンに３本の槍を命中させ打ち取ったことで、戦況は逆転しました。そのドラゴンは、後で聞くところによると、ドラゴンの中でも腕の立つ騎士だったそうです。
　見るからに強そうなドラゴン軍も、決して不死身ではないことを知り、我が軍は勝利を意識し始めたのです。そこで、クロスボウを置き、かわりに槍を取りました。槍兵方形陣をしき、ドラゴンの戦列に風穴をあけてやったのです！
　ドラゴンどもは、これほどまでに粘り強い相手に出会ったことがないらしく、大変に困惑した様子だったそうです。それは、規律やチームワークの重要さを理解する知性の欠けた、野蛮な種族だからに他なりません。戦闘機械と化した我が軍の前に、彼らはなすすべもなく、次々と安全な城の中へ退却を始めました。そのときです。城の窓から、新たな飛行連隊が襲いかかってきたのです。上空から我が軍の方形陣めがけて、黒煙と伴った炎を吐きかけました。我が軍の大半は焼けただれ、焼け残った兵士は慌てるばかり。地上に残っていたドラゴンは、混乱する我が軍のただ中に斬り込み、怒りに任せて暴れまくったのです。空から舞い降りたドラゴン騎士たちは、見るからに恐ろしい大きな武器を振り回し、兵士たちを斬り刻んでいきました。彼らは、血も凍るような不気味な言葉を発していたそうです。それはまさしく死の言葉でした。それを連呼しつつ、兵士をひとり殺すごとに、声を高めるのです。これを報告してくれた兵士は、そのときの言葉を克明に覚えていました。意味はわかりませんが、それはこうです。
『アナク・ドラッケン・アグナイール・ハースト』
　我が軍は、もう狼狽するばかり。最後まで残っていた騎士が、ドラゴンの前に倒れると、残された兵士たちは、一目散に逃げ出したのです。幸い、ドラゴンは人間よりも足が遅いため、その場はなんとか逃げることができたのですが、ドラゴン騎士による空からの執拗な攻撃に、逃げた兵士たちもほとんど殺されてしまいました。結局、この話を報告してくれた兵士が、私たちの元へ帰ってきた唯一の生存者だったわけです。彼は、死んだふりをして、難を逃れたそうです」

　風魔法官は、また一息つくと、茶をすすった。この男をひと目見たときから、これはペテンに違いないと私は踏んでいた。しかし、彼はまったく、しっぽを出さない。予想外の展開だ。私はしだいにイライラを感じ始め、天井の装飾を見つめてため息を洩らした。男もため息をついた。それには、いかなる言葉をもってしても語れない、私の疑念を打ち破るに十分な真実味が、感じられた。話が始まった。

「これまでの話は、この先に比べれば、子供の寝物語のようなもの。なんとドラッケンどもは、飢えたけだもののごとく、倒れた我が同朋の肉を貪り喰い始めたのです。怪我をして動けずに苦しんでいる者も、生きたまま喰われました。
　この一部始終の唯一の証人である兵士は、死んだふりをしたまま、薄目を開けて見ていたそうです。しかし、恐怖のあまり、体を動かすこともできずにいました。彼は、３匹のドラゴンが、城の一番高い塔のてっぺんから飛び出して、戦場の中心地に降りてきたのを見ました。２匹は赤いドラゴンで、目を見張るほど立派な服装をしていたそうです。しかし、彼の目は、３匹目に釘付けにされました。
　その３匹目のドラゴンというのは、身の丈は６メートル近く、きらきら輝く金の鎧を着ていたそうです。そして、みごとな装飾が施された兜の下、ちょうど額のあたりに、巨大な宝石が輝いていました。それは血のように赤いルビーで、固い光を放っていたのです。ドラゴンの目玉と同様、非常に目立っていたそうです。そのドラゴンが着地するやいなや、その他のドラゴンは、みな膝をついて、こう叫んだのです。
『ハック！　ハック！　ドラッケン！』

　金の鎧を着たドラゴンは、どうやら城の主のようでした。それは『ハック』と言って、家来どもの賛辞に答えました。ヤツは、人間の兵士の遺体を掴み上げ、あちこち眺め回すと、無雑作に地面に投げ捨て、雷のような割れんばかりの大声で笑ったのだそうです。それにつられて、まわりのドラゴンたちも一斉にはしゃぎ出し、異様な振動が空気に伝わってきたとのこと。ドラゴンどもは、はしゃぎながら、山積みにされた人間の遺体から、競って旨そうなものを選び口にし始めたのです。そのあまりに衝撃的な光景に、例の兵士は気を失ってしまいました。彼は、

その遺体の山の下に隠れていたのですが、どうやら彼はドラゴンにとっては、あまり食欲をそそる体形をしていなかったようです。彼の同朋は、みな一応に食い荒されたにもかかわらず、彼は無傷のまま夜まで残り、気がつくと、周りは同志の残骸の山。闇に乗じて、なんとかそこから這い出し、逃亡に成功したのです」

胸が悪くなるような悪趣味なユーモアも、聴衆に恐怖感を募らせるだけであった。我々は身じろぎもせず、風魔法官を阿呆のように見つめるだけだった。金の鎧を着たドラッケンの首領の描写には、私も骨の髄まで凍らされたような気がした。我々は、その怪物と対決しなければならない運命にあるのだ。私の隣に座っている３人も、この話を先に聞かされていたら、こんな恐ろしい任務に志願したはずがない。私はと言えば、それは神のみぞ知るである。正直言って、志願する勇気があったかどうか、はなはだ疑問である。

堰を切ったように質問が集中した。彼の話には、はっきりしない点が多すぎる。しかし風魔法官は、どの質問にも答えようとはせず、手をあげて静粛を求め、話を進めた。

「私は、前にも述べたとおり、何人かの仲間と共に、地獄を見る直前に、その場から逃げていました。ほんの初歩的なもの以外、魔法の力を失ってしまった我々は、あの場にいたとしても、何の役にも立てなかったでしょう。我々は馬にまたがり、何時間だったでしょうか、もうこれ以上馬がもたないというところまで走りました。

我々は、人目につかない谷間を見つけ、そこにキャンプを張ることにしました。メンバーは10人以上いました。私の他に、魔法使いと僧侶と貴族がそれぞれ１人ずつ。それに、兵士が７人と商人が２人。商人のうちのひとりは、様々な国の言葉に通じていました。話をするような雰囲気ではありません。馬の世話をするのがやっとで、あとは崩れ込むように眠ってしまいました。

それから４時間後には、我々はキャンプをたたんで出発していました。そして間もなく、沼地に出ました。速度が急激に落ちてしまいました。食糧の心配はありませんでした。その辺で捕まえた小さな爬虫類を、魔法使いが呪文で作った火の玉で焼いて食べることができたのです。

沼地を渡る途中、遠くに巨大な蛇を発見しました。巨体を引きずりながら、歯をガチガチと鳴らしていました。幸い、蛇は我々には気付かず、通り過ぎていきました。そして我々は、また沼の中を歩き始めたのです。

しばらく行くと、地平線に村が見えました。メンバーからは、村に行ってみようという意見が多くでました。ドラゴンの城から逃げること３日間。ここまで来れば、もう危険はないだろうと踏んだのです。どちらにせよ、もう食糧も底をついてしまったし、仲間の２人がかなり衰弱し、僧侶の診断では、治療と休息が必要とのことでしたので、村へ向かうことに、私も同意しました。あの城のときと同じ目に遭う危険性はありましたが、とにかく、この村が、少しでも友好的に我々を迎えてくれるほうに賭けるしかなかったのです。恐る恐る、村に入りました。村人は、我々を見て、かなり驚いた様子でした。

村の住人は、我々人間よりも少しだけ背が高く、容姿はそれほどかけ離れてはいませんでした。ただ、ちょっと違うのは、彼らの皮膚は緑色の鱗におおわれ、耳が尖っているという点でした。

ひとりの村人が近付き、話しかけてきました。我々の通訳を買ってでた商人は、その村人の言葉を聞いたとたんに、情けない顔になってしまいました。まったく聞いたことのない言語だというのです。しかし、それとは対象的に、僧侶と魔法使いが、驚いた顔で私のほうを振り向いたのです。私も驚いていました。村人の甲高い声で話されている言葉は、間違いなく、魔法の奥義を伝える古代魔法語だったからです。そうしたわけで、私は、彼らと会話を交わすことができたのです。

彼らは、我々を歓迎してくれました。村長が食事を用意してくれました。我々の矢つぎ早の質問に、村長は一生懸命に答えようとしてくれたのですが、我々が学んだことは、ほんの僅かでした。無理もありません。ここは小さな村で、彼らは純朴な村人に過ぎないのですから。彼らは、沼地の中央の城におられる王女に、忠誠を捧げているとのこと。また、この島の中央には大きな町があるということ、彼らは非常に伝統のある種族で、厳格な階終があり、この村の人々は、最も下層の階級に属していることなどが、村長との会談でわかったのです。

我々は数日間、この村に滞在しました。ドラゴンとの戦闘の様子を伝えてくれた兵士と合流したのは、このときでした。いろいろな話を総合することで、彼らの社会の上流階級が、どのような連中で構成されているかを知り、私は、我々の将来に不安を感じたのです」

私は僧侶と共に、この村に滞在している間を利用して、自分たちの古代魔法言語の能力を磨いておくことにしました。村は、貧しいながら、住人は幸せそうでした。しかし彼らの姿は、やはり我々にとっては嫌悪感をもよおさせるものでした。私が知る範囲では、どの爬虫類よりもマシではありましたが、特に女性には、私の心は拒絶反応を示しました。この人間と似て非なる存在に、私は戸惑いを禁じ得ませんでした。

ひとつ、大変に気になることがありました。彼らは、明らかに古代から続く大変に伝統ある種族であるにもかかわらず、過去に関する記憶を、一切持っていないのです。まるで、つい昨日、空気の中から生まれ出たようなのです。そんなことが、あり得るでしょうか。

我々は、話し合いの結果、この村を去ることに合意しました。私は、村人との会話にしばしば登場し、そのつど重要な意味を持っていた町を訊ねようと提案したのです。中には、シャダークに引き返し、故郷に帰ろうと主張する者たちもいましたが、この不思議な新世界に上陸して、さらに多くの情報が収集できる絶好の機会があるにもかかわらず、すごすごと国に帰ったのでは、皇帝陛下もご満足なさらないだろうと、彼らを説得したのです。僧侶も私と同じ考えで、説得にあたってくれたのです。

メンバー全員が、体力面でも精神面でも、十分なコンディションで村を出発することができました。十分に休息が取れたことと、道に沿って歩いたのが幸いして、進み具合も、村に来る前よりも速くなりました。道の両側は、沼から次第に湿原に変わっていきました。そして、いつのまにか、広大なドラゴン人の穀倉地帯になっていたのです。湿田から、ときたま農夫が顔をあげて、我々を物珍しそうに眺めていました。たぶん、我々が彼らを奇妙な生物だと感じるように、彼らも我々のことを、怪物でも見るような気持ちでいたことでしょう。農夫たちはみな、遠慮深く、非常に礼儀正しいのですが、我々とは話をしたがりませんでした。

ついに我々は、巨大な城下町の城壁にぶち当たりました。その瞬間、我々の体は硬直し、神経が張りつめました。最初にドラゴン人に遭遇したときの記憶は、まだ生々しく残っています。我々も八つ裂きにされて、喰われてしまうのだろうか。不安が募りました。町の門は大きく開かれ、衛兵はいません。荷車を引く農夫や、いろいろな種類の家畜を連れたドラゴン人たちが、押し合うようにして、門を出入りしています。実に多くの家畜が、この壁の中に連れ込まれるのを見て、彼らの主食が肉であり、しかも、生肉を尊ぶということを、あらためて知らされました。

建物も変わっていました。たとえば、建物の入り口は高さが４メートル近くもありました。我々は、珍しさのあまり、あたりをキョロキョロ眺めながら歩いたのですが、反対に、住民の視線は、我々の馬に注がれていました。彼らの世界には馬はなく、代わりに、大型の爬虫類を乗用に利用しているのです。ちなみにそれは、馬のように穏和な性格で、乗り心地は馬よりも滑らかです。遠くに、ドラゴン人の兵士を発見しました。

兵士は、他のドラゴン人よりも背が高く、たぶん２メートル50センチはあったでしょう、一般人とはまったく異なる雰囲気を持っていました。

酒場のような店をみつけたので、食事をとろうと入ってみました。我々が店に入ると、店内は一瞬静まりかえりました。給仕が声も出さず、手振りで我々に座るように言い、我々は、大きなテーブルの前の大きな長椅子に腰を下ろしたのです。出されたご馳走を見て、我々の胃袋は裏がえりそうになりました。それは、黄色い液体に浸された、分厚い生肉だったからです。ビールのほうは、緑色で塩味が利いていましたが、悪い味ではありませんでした。ただ、アルコール分は高いようで、数人のメンバーは、たった１杯で酔ってしまいました。

中央広場に建っていた寺院と思われる建物に行ってみたいと、僧侶が言いだしました。私は、あのドラゴン人との戦闘を経験した兵士を伴うのを条件に、それを許可しました。

彼らが店を出るやいなや、入り口に大きなドラゴン人の影が立ちはだかりました。見にまとった複雑な鋲細工が施された鎧は、過剰なまでの派手な彩色がなされ、一撃必殺の歩く殺人兵器であることを誇示しているようでした。頭は、これまた目を見張るような派手な兜におおわれ、完全装備のいでたちです。鎧の保護からはみ出して体が露出している部分もありましたが、岩の瘤のように盛り上がった筋肉は、保護される必要はないと主張しているようでもありました。そのドラゴン人が放出する冷血で残忍な空気に、我々はその場に氷づけにされました。軽々と手に持ったギザギザの刃物も、実際に近くで見ると、非常に大きく重厚なものだったのです。

彼が店に入るなり客は一斉に立ち上がり、深く頭を下げました。そして、ガーガー声を揃えて、『ハック！　ハック！　ドラッケン！』と、そのドラゴン人を讃えたのです。我々は、この高貴なドラゴン人に敬礼もせず、ぼんやりと座ったままでいましたが、慌てて立ち上がり、周りのドラゴン人の口を真似て『ハック！　ハック！』とやりました。しかし、どうにも彼らの発音は難しく、舌がもつれて巧く言えません。

ドラゴン人はこちらを振り向き、大股で近寄り、我々が何者で、何の用があってこの町へ来たのかを言えと迫りました。彼の低くしわがれた声は、血が凍るほど恐ろしく聞こえました。そして、彼の息の臭いに、私は吐き気をもよおしました。

私は彼に深々と敬礼をして、我々の船が座礁し、帰る方法を捜しているということを説明したのです。ドラゴン人は私の答えにうなづくと、さらに質問をしました。我々の国のこと、習慣のことなどです。彼の目には、知的な興味が表われていました。どうやら我々は、知性と教養のあるドラゴン人に出会えたようでした。

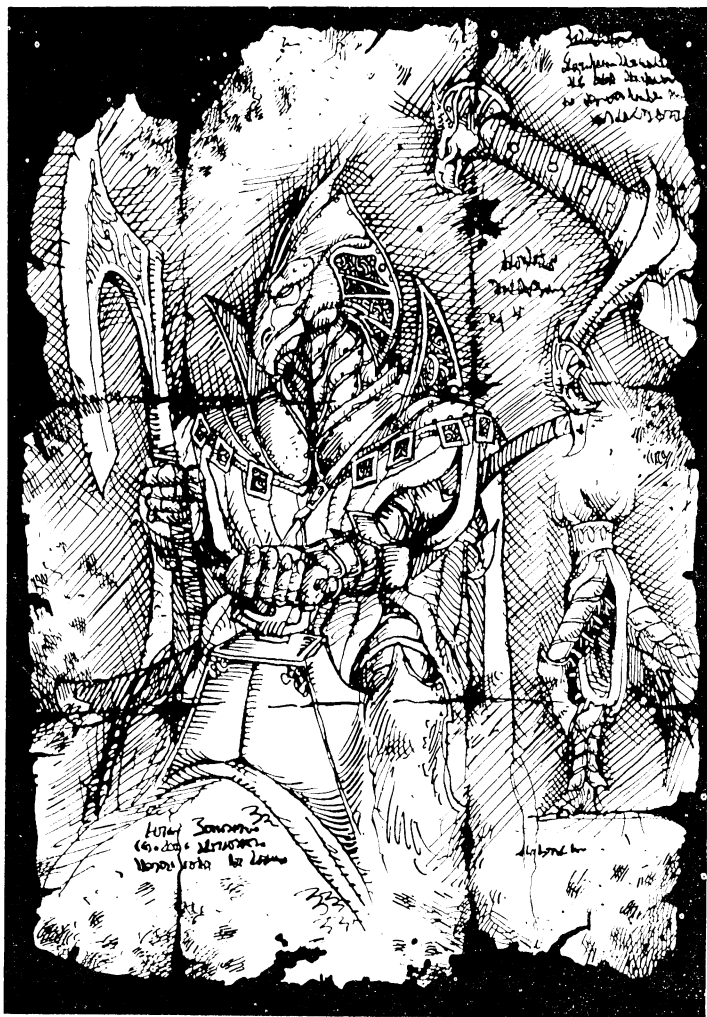
彼は、我々が食事に手を付けていないのを見ると、それを取り、一口で飲み込み、いかにも旨そうに、爬虫類特有の固い唇を鳴らしました。給仕が、バケツ程もある容器に緑色のビールを出すと、彼はそれを一息に飲み干し、満足げに大きなゲップをしました。私は、失礼があってはならぬと思い、その粗野な振舞いから目をそらすよう気をつけました。彼の質問は止まることを知りませんでした。そのほとんどが、軍事的な質問だったので、彼の疑惑

「……みごとな装飾が施された兜の下、ちょうど額のあたりに、巨大な宝石が輝いていました……」

を招かない範囲で、なるべく情報を与えないよう努めました。幸い、彼は私に何の疑いも抱かなかったようです。しかし彼の質問は巧妙で、自分で言った嘘が矛盾を引き起こして、私が自分で自分の首を絞めるような状況に追い込まれそうになったことも、何度かありました。私は冷や汗をかきながら、そのつど、なんとか話の辻妻をあわせたのです。

質問は2時間続きました。彼はやっと腰を上げ、上層部が我々の処置を決定するまで町を離れないよう言い残し、店を出ていきました。何か悪い予感がしました。とにかく我々は、僧侶の戻りを待つことにしました。僧侶が帰ってきたのは、それから2時間経ってからのことです。

僧侶が帰ってくるまでの間、店には我々をひと目見ようと、多くのドラゴン人が、入れ替わり立ち替わりやってきました。まるで見せ物でした。いたたまれなくなり、我々は僧侶が戻るやいなや、代金を払って店を出ました。

店の外では、ドラゴン人の兵士がひとり、我々を待っていました。一緒に来いとの要請があり、我々はおとなし

「……遠くにドラゴン人の兵士を発見しました……」

く従いました。彼らの力の強さは先刻承知であったため、へたに逆らっては危険だと判断したのです。しばらく歩くと、我々は、堂々と立派な建物の前に到着しました。我々は、青い肌のドラゴン兵士に守られた大きな門をくぐり、庭園に通されました。そこには、我々の馬が、見慣れない乗用の動物と共につながれていました。間もなく、戦闘用の防具を身につけた、どこか気品のある女性のドラゴンが現われ、我々を部屋に案内してくれました。それは大変に快適な部屋で、窓からは、大きな川と港がよく見渡せました。

部屋には大きく頑丈なベッドが人数分用意されていました。そこに横たわると、大のおとなでも、父親のベッドでふざける子供のように見えます。私が、水の滴る音がするのでその音源を探りました。それは、蛇口から絶え間なく湧き出る水の音でした。蛇口は、ドラゴンの頭を模して作られた、みごとな工芸品でした。ドラゴンの口の部分から流れ出る水は、冷たく澄んでいて、少々鉄分が多いように感じられたものの、大変においしく飲むことができました。

「……彼の低くしわがれた声は、血が凍るほど恐ろしく聞こえました。そして、彼の息の臭いに、私は吐き気をもよおしました……」

ドラゴン人の女性は、この部屋を自由に使うようにと、我々に伝えました。ここではどうやら、敵対視されていないようだと判断し、しばらくドラゴン女性の言葉に甘えることにしました。一息つくと、僧侶が、大変に重要な報告があると、私に伝えました。寺院の探索から帰ってきてから、ずっと、それを話したくてウズウズしていたのだそうです」

風魔法官は、またしても、もったいぶって話を切った。早くその先が知りたい私と３人の勇者たちは、忍の一字で彼がゆっくりと茶をすする様子を見ていた。しゃべるドラゴンの国とは、いかなるところか。興味は尽きない。彼は、やっと茶碗を置くと、話に戻った。

「我々の寝室は、大きな居間を取り囲むように配置されていた。居間には、これまた大きなテーブルと椅子のセットがあり、私はそこに腰掛けて、僧侶の話を聞くことにしたのです。その話とは、こうでした……」

The Priest's Tale
僧侶の話

それは確かに寺院でした。中に入り、長い廊下に沿って歩きました。廊下の床は大理石で、壁には、飛行するドラゴンの姿と、見慣れない文様のようなものが、交互に彫刻されていました。警備員のような者はなく、冷たい空気の中に、目と鼻をツンと刺すような香の匂いが漂っているだけでした。

廊下の先は、眩惑されるほど大きな楕円形の控の間でした。天井の高さは、場所によっては15メートル程もありました。ドアが2ヵ所あり、その両方に、珠を高々と掲げたドラゴンの像が4体ずつ置かれています。部屋の壁には、床から天井にかけて、螺旋状に長大なレリーフが彫られています。レリーフの題材は、伝説や寓話に登場するドラゴンのようでした。その壮観な芸術作品から、やっとの思いで己の目を引き離すと、私は、今入ってきたのとは違う、もうひとつのドアに向かいました。ドアをくぐると、そのあまりにも荘厳な光景に、私はしばし、息をするのも忘れてしまったほどです。私の視野をできるだけ広げて見上げると、翼を広げたドラゴンの形をした数本の柱が、青い透明なクリスタルの丸天井を支えているのです。その柱の足元には巨大な火鉢があり、炎が燃え盛っていました。私はそのとき、遠くの香の煙の向うに、ドラゴン人が来るのに気がつきました。

彼らはゆっくりと、体を揺さぶりながら、円を描くように歩いてきます。目は虚空を見つめ、例のガラガラ声で、絶えず『アナク・ドラッケン・アグナイール・ハースト』と唱えていました。単調なリズムで繰り返えされる経文を聞いていると、催眠術にかけられたような気分になってきます。私たちは、彼らの瞑想を破らぬように気を付けながら、彼らの列について、できるだけ祭壇に近づこうとしました。

柱のドラゴンに、ずっと見つめられているような感じがしました。それらは頭を下に向け、額のジェムを輝かせていました。柱を兼ねたドラゴンの彫像の中には、よく知られているものや、想像されていたものもありましたが、その他のドラゴンは、いまだかつて、いかなる書物においても、見たことも聞いたこともない、人の想像を外れた種類のものでした。また、それらの表情は、恐ろしい形相のもの、やさしい目をしたもの、辛く悲しい顔をしたもの、楽しい顔をしたもの、様々です。どの彫像も、目には人間の頭ほどもある宝石が埋め込まれていました。

この部屋の規模たるや、圧倒的な大きさです。何か、時間自身も忘れてしまうほど遥かな太古の光景を見ているようで、人類などは入ることが許されない厳格な宇宙です。クリスタルの天井から注し込んだ光の柱が、この世のものとは思われぬ、奇異なる彫像を包み込み、その足元には、読経の声がたなびいている。

危うく読経の催眠術に引き込まれそうになって、私は頭を激しく振りました。私の横では、私を護衛するために付いてきたはずの兵士が、虚空を見つめながらドラゴン人の経をつぶやいていました。彼の体が次第に左右に揺れ出し、あの不気味なドラゴン人の動きを真似し始めたのです。私は彼の体を両手で掴み、空っぽの頭から歯が抜け落ちんばかりに、激しく揺さぶってやりました。彼はどうにか正気を取り戻しましたが、その目は、魔の悦楽を知ってしまった者が見せる、苦痛の色を浮かべていました。

魂が抜けたようになってしまった兵士を気にしながら、私は祭壇に近づきました。祭壇は、4体のひざまづく白金製のドラゴン像の上に、正方形の石盤を乗せたものでした。祭壇の向こう側には、ドラゴンの姿をした、御神体とおぼしき像がありました。どれ程古いものか、私の想像では及びません。口許に微笑みを浮かべ、慈悲深い顔で、信者たちを見下ろしています。そのルビーの目からは、8つの涙がこぼれ、それぞれが、尾を引いて体の各部分に

流れているという姿でした。両腕は掲げられ、両手を開いて、祭壇の各方向に施しのポーズを示しています。大きく広げられた翼は、その巨大な楕円形の部屋の天井を形作っています。

御神体は、翡翠の座に腰を下ろしていました。尾は、祭壇のところまで伸びて、円を描いています。思うに、この像の作者は、我が栄光の帝国の、いや、人類史上、どの芸術家、どの職人をもってしても、とうてい及ばない、高度な技術と感性の持ち主でありましょう。この驚異の像がかもし出す、えも言われぬ慈悲に満ちた心休まる雰囲気は、残酷きわまりない冷血動物という、我々が認識しているドラゴンとは、正反対のドラゴンの存在を表わすものです。

あまりの神々しさに我を忘れて見入っていた私は、突然、冷たく、しかし力のある声に呼びかけられました。

「どなたかな？　どちらから、おいでか？」

聖職者らしい恰好をしたドラゴン人が、私の脇に立ち、私の答えを待っていました。なにせ、あのすばらしい像に、完全に心を奪われておりましたから、突然の呼びかけに、私はいささか動転し、咄嗟の対応ができませんでした。しかし、僧侶の眼差しは、冒瀆者を睨みつけるものではなく、やさしく慈愛に満ちていました。私は、兵士のことが心配になったのと、慌てていたために舌がもつれ、わけのわからない返事をしてしまいました。あの馬鹿者は、またしても私の懸念どおり、ドラゴン人の経を唱えながら、体を揺さぶっていました。

「あの方なら、心配はいらない。一緒に来なさい、人間。いろいろお伺いしたいことがある。あなたも、私たちに聞きたいことが、山ほどあるのではないですか」

この僧侶が、なぜ人間のことを知っていたのか、私は不思議でなりませんでした。まさか、ドラゴンが常に人類の最大の敵であったということも、この僧侶は知っているのではないだろうか。そう考えると、私の背筋に戦慄が走りました。とにかく、黙って従うのが一番と決め、僧侶の後について、神像の裏に隠れていたドアに向かいました。通りすがりに兵士の頬をひっぱたき、目を覚まさせてから、彼も引きずっていきました。ドアを抜け、聖具室のようなところを通り、小さな部屋に着きました。そこで、僧侶は大きな肱掛け付きの椅子に座り、私たちにもそうするように、薦めてくれました。

それは、実に滑稽な光景でした。椅子が大きいため、私の足は床に届かず、まるで父親の前に座らされた子供のようでした。

僧侶は二重のまぶたを閉じ、ほんの一瞬、沈想したかと思うと、次の瞬間、カッと目を見開いて話を始めました。

「人間。あなたは、その服装から察するに、私同様、聖職者とお見受けする。それゆえ、私がこれからお話することは、あなたには、少々受け入れがたいかも知れん。しかし、私は決して偽りを申さぬ。もともと私たちドラゴン人類の心には、あなたがたに対して、決して特別な悪感情はない。あなたがたから、極度な憎悪をぶつけられれば、当然それなりに、こちらの感情も変化することもあるが……」

これは明らかに叱責の言葉だと、私は理解しました。何よりも、彼の目が、そう物語っていました。

「創世の以前は、影の他には何もなかった。そして、父は星を創り、それぞれの世界に、生命を植えられた。この世界を創られ、様々な種類の生き物をここにお生みになったのも、そのときだ。すべての生物は、自由だった。その当時は、巨大な爬虫類が闊歩する時代で、それらはエサの取り合いに明け暮れていた。そして父は、ついに、父が理想とする生物をお創りになったのだ。それが、ドラッケン。つまり我々だ」

私は、ショックのあまり椅子から落ちそうになった。

「我々は、数十万年の間、すべての土地を支配し、すべては我々に従ってきた。その中には、今はもう海中に没した大陸もある。我々には、できないことはなかった。我々は、自由と満足を与えたもうた父に感謝し続けた。しかし、我々の支配層にあたるドラゴン王族たちは、それでは満足できず、自分たちも、生命の創造をしたいと考えたのだ。そうして彼らの手によって創られたのが、人間であり、その他の知性を持つ生物だった。これが真実であるかどうかは定かではないが、私は真実であろうと思う。いつしか、ドラゴン王族たちは遊びに飽き、長い眠りにつ

いた。長い長い夢を見て、目を覚ましたときは、世界はすっかり様変わりしていたのだ。巨大爬虫類は姿を消し、ドラッケンも人間も、どこかへ行ってしまっていた。ドラゴン王族は、翼を広げて空に舞い上がり、人間を探した。そして、やっと見つけた当時の生き残りに、火の雨のこと、長い冬のこと、飢饉のこと、疫病のことなどを聞いたのだ。

そこでドラゴン王族は一同に会し、父の御託宣を求めた。すると父が彼らの前に現われ、こう言ったのだ。彼らが創った感情を持つ生物は、次第に高慢さを増したため、罰を下したのだと。父が与えたもうた罰に耐え、なんとか生き残った人間は、自分たちを生み出したドラゴンを逆恨みするようになり、ドラゴンは人間の敵であるという認識を持つに至ってしまった。しかし父は、いつか、人間の罪を許すときが来ると述べられた。父はそれでも、人間を愛していらっしゃるからだ。

ドラゴン王族はすっかり意気消沈してしまった。それゆえ、活力をもって氷に閉ざされた世界を建て直すかわりに、それぞれの城に戻り、夢の中にかつての栄光を蘇らせようと、再び眠りについてしまった。

長い冬も、ようやく終わりを告げ、ドラゴン王族たちも眠りから覚めた。そして彼らは、またしても様変わりした世界に衝撃を受けてしまった。なんと、彼らの土地に無数の人間がはびこり、我が者顔に文明を築いているではないか。

ドラゴン王族たちは、その昔、雲海の上の城を出ては、人間に会いに出かけていた。そしてそのつど、人間は生みの親に孝行をしてくれたものだった。しかし、このときはもう、人間は生みの親の顔を忘れてしまっていた。それどころか反対に、ドラゴンは悪い生き物であるという認識が人間の間に定着しており、人間はドラゴンに憎悪の感情を抱いていたのだ。

そのため、いつものようにドラゴンが人間たちを訪問したとき、人間はそれをドラゴンの襲撃と思い込み、武力をもってドラゴンを追い返えそうとした。恐怖に狂った人間の攻撃は、執拗で残忍なものだった。ついにドラゴンは、実の子供の手によって殺され、ドラゴンの抵抗によって、無数の人間も命を落とした。ドラゴンと人間の反目があらわになったのは、そのときからだ

しかし一方では、ドラゴンの記憶を大切に守り、尊敬と愛をもってドラゴンを受け入れる人間たちもいた。ドラゴンは彼らに、太古の歴史や魔法を、古代の高貴なドラッケンの言語を通して教えたのだ。これが人間の魔法使いや僧侶の祖先にあたる。ドラゴン王族は、この忠節なる子供たちを使って、父の存在を忘れ去った不徳の人間の駆除を計ったのだ。

戦いは、予想以上に長く悲惨だった。しかし、魔法とドラゴンの応援を得て、選ばれた人間は、背徳の軍隊を討ち負かし、戦禍を逃れて深い洞窟や山に逃げ込んだ、ごく少数を除いて、親の恩を忘れた人間は、この土地から一掃された。

そして、黄金時代が到来したのだ。ドラゴン王族の宮廷を中心に、美しい町が建設され、ドラゴンと人間は、両方の父を讃えつつ、平和に暮した。まさに、それ以前にも、それ以降にもない、豊かで幸せに満ちた時代だったと聞いている。

ドラゴン王族たちは、このすばらしい世界を築いたことに満足し、また、長い眠りにつき、しばらく忘れていた夢の国に戻ってしまった。追放された人間たちは、この時を待っていた。闇の世界から、山奥から、復讐に燃える呪われた人々が続々と現われ、平和な文明社会を掻き回したのだ。僧侶と魔法使いは、ドラゴン王族を目覚めさせ、応援を頼もうと手を尽くしたが、彼らは夢の世界から戻ってきてはくれなかった。仕方なく、僧侶と魔法使いが、自らの力を使って反逆者に対抗し、辛うじて、世界を完全な破壊から救ったのだが、かつての黄金の栄華はなくなり、勢いもなくしてしまった。これがもとで、大魔道士と大僧正は、ドラゴン王族に対する信頼を欠き、ドラゴンは憎悪と蛮行と裏切と受難の象徴であると世間に訴え、人間にそっくりな新しい神を創り出してしまった。寺院が建立され、新しい神はそこで魂を与えられ、それからは、新しい神が人間に魂を与えるようになった。そして、今日、あなたたち人間の時代が始まったというわけだ」

「ドラゴン王族が目を覚ましたときは、もう何もかもが変わっていた。まだ、ほんの少数ながらドラゴンに敬意を表わす者もないではなかったが、陸も海も、人間をはじめとするドラゴン王族が生み出した動物たちの世界になっていた。

ドラゴン王族は宮廷を追われ、人間はドラッケンに対して総攻撃をしかけた。人間の魔法力と工業力は、すでに私たちのものを凌いでいた。ドラッケンの轍を踏むまいと、人間は、強力な破壊兵器を操って、私たちを完全に抹

殺してしまったのだ。
　宮廷は略奪に遭い、子供は惨殺され、その親は切り刻まれた。ドラゴン王族たちは、世界の果てや、地の底に身を隠した。そこは、かつて自分たちの子供を追いやった場所だ。宇宙の宮廷からすべてを見守っていた父は、ドラゴンたちの哀れな姿に涙した。最後のドラゴン王族が殺されるのも、時間の問題であることを、父はご存知だった。そしてそのとき、断末魔の叫びの中で、父から子へ、ひとつのメッセージが伝えられることもご存知であった。『ドラゴンの栄光の時代！　新世界創世！　アナク・ドラッケン！』それは、その瞬間に世界の運命を凍結し、まったく新しい時代を開始させるものだ」

　そのメッセージを唱えたとき、僧侶の顔が変わりました。何とも言えず、嬉しそうな顔になったのです。私の心臓は、とてつもなく重いものによって、押し潰されそうでした。私の周りの宇宙は、まさに粉々に砕け散ろうとしていました。それは、あまりにも明確でした。疑いを挟む余地もありません。息をするのがやっとでした。頭は、無意識にうなずくばかり。黄金色の天から鳴り響く太古の鐘の音にも似た、ドラゴン僧侶の真実の声が、再び私の鼓膜を襲いました。

「人間、私はあなたがたに心から同情する。実は、数週間前に、ハズル・メクトルの予言が、現実のものになったのだ。武者修行中の騎士が、ドラゴン王族の最後のひとりを殺害してしまった。これは、あなたがた人間にとっては、自殺行為と言えよう。そのドラゴンが死ぬ間際、例のメッセージが叫ばれ、すべての父は約束どおり、それまでの世界に代わる、新しい世界を開始させたのだ。私は、父の復活を準備するために、再びこの世に生を受けた。それに続いて、広い範囲で蘇生が行なわれた。
　この世界が、あなたの目に奇異に映るのは、そんな理由からだ。人々は、古い記憶と新しい世界に戸惑っている。彼らはみな、私同様、過去において、父に対する忠誠心が厚かった者たちだ。そうした者たちが、選ばれて、再び生命が与えられたのだ。
　この島は、全世界を包み込むまで、膨張を続ける。あなたがたの国も、今にこの島に飲まれて滅亡するだろう。そして人間は、歴史の片隅に忘れ去られてしまうであろう。ドラッケン王子たちが、兵をあげ、人間に総攻撃をしかける。人間の胸を裂いて魂を引き出し、子供たちを己の血の海に溺れさせる。これは、新しい世界の建設を早めるための、必要な処置なのだ。
　しかし、これだけは、わかって欲しい。私を含む、すべてのドラッケンは、人間に対して特別な憎悪は抱いていない。これは運命なのだ。父のご意志は、貫徹させなければならないのだ」

　僧侶は立ち上がり、哀れみの目で私を見下ろしました。話は終わったと悟りました。そして、私たちの運命はすでに決定されているということも、悟りました。私は僧侶に深く頭を下げ、兵士を引き連れて部屋を出ようとしました。そのとき、僧侶の最後の声が響いたのです。

「お待ちなさい。父は８つの涙を流されたと言われているが、そうではない。流されたのは９つだ。そのうちのひとつは、もうひとつの人種のためのもの。あなたが、この意味を理解されんことを期待している……」

　正直申して、私にはその意味が、さっぱりわかりませんでした。ともかく私は僧侶に礼を述べ、部屋を出ました。祭壇の向うに立つ巨大なドラゴン像の前を通るとき、私は深い畏敬の念を覚え、立ち止まって像に一礼しました。そのとき、像の目から、輝く涙が溢れ出てくるような気がしました。

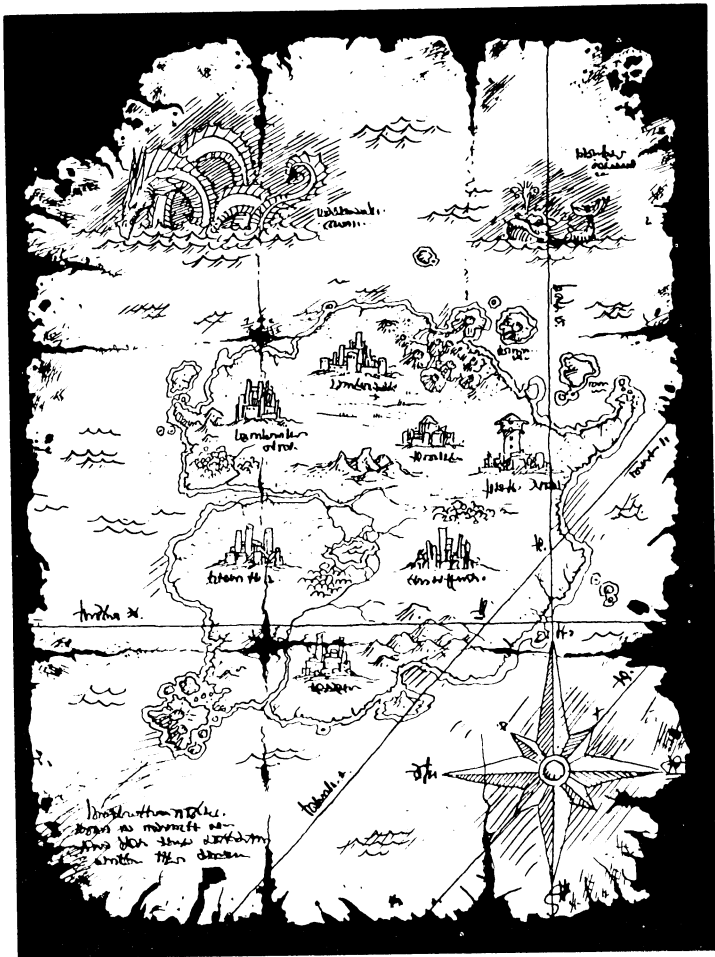
「僧侶の話が終わったあと、私は言葉もなく、しばらく沈黙が続きました」
　風魔法官は、茶で喉を潤すと、話を続けた。
「我々は頭が痛くなるほど考えた末、一刻も早くシャダークに引き返し、全世界に対し、今何が起こりつつあるのかを伝えることが最重要であるとの結論に達したのです」
　バール・アール・アン・ジュルジャン・フォン・ウェセンマイヤールよ、しっかりしろ！
　と、私は物も言えずに呆然とする自分自身を叱咤した。皇帝陛下のお目が、妙に輝いて見えた。この話の一部始

終を、真実とお受け止めになられているようだ。ということは、私の法力は完全に失われたわけではないのか。私の横の３人の同志たちの表情が固くなった。風魔法官が身を乗り出したのだ。

「私たちは、急遽、行動計画を立てました。そのときはもう、日が落ちていましたが、これ以上そこに留まることはできませんでした。我々は、命を捨てても、この話を伝えなければならなかったからです。
　そのとき、ドラッケンの女性が部屋に入ってきて、明朝、王子が我々にお会いになると伝えました。私は、大変に光栄に存じますと彼女に答え、彼女が部屋を出るなり、出発の準備を始めました。
　準備をしているとき、僧侶は私に、その島に残るとの意向を打ち明けました。たぶん、あの寺院に身を置きたかったのでしょう。精神的なショックに、前後の見境がつかなくなってしまったのではないかと、我々は彼の言動に不安を感じたのですが、話を聞いてみると、どうやら彼は、しっかりとした信念に基づいて言っているらしいことがわかったため、我々は彼の意志を尊重することにしました。
　夜が更けるのを待って、魔法使いがスクロールの形で待っていたテレポーテーションの呪文を唱え、我々を町の港まで移動させました。そこで僧侶に別れを告げると、１艘のボートを拝借して、港を出ました。魔法使いは移動の魔法を使い果たしてしまったので、音を立てないように帆を張って、川を下ったのです。幸い港には衛兵の姿はなく、私も小さな風の呪文を唱えることができたので、ボートは思いのほか、速く進んでくれました。岸が遠くに霞むあたりまで来ると、全員が力一杯にボートを漕ぎだし、私はもっと強い風を起こして、速度を上げました。
　夜明けには河口に着き、島の沿岸をシャダーク目指して進みました。これだけ町から離れれば、もうドラッケンも我々を探して追っては来ないと判断したからです。
　ボートを漕ぐこと２日目にして、ようやくシャダークの巨体が視界に入ってきました。シャダークは、すでに浅瀬から引きだされ、なんとか船の姿を取り戻していました。出航の準備も整っているようでした。我々はボートから身を乗り出して手を振り、声を張り上げて、船上の人々に帰りを告げました。手を借りて乗船するまで、シャダークの甲板は、我々の帰りを歓迎する人々で祭のようでした。我々はもう戻らないと思われていたのだそうです。ほんのわずかではありましたが、ドラッケンとの戦闘に参加しながら、運よく帰ってこれた兵士もいました。
　一等航海士が艦の指揮のもと、我々は帝国の首都に向けて出向しました。船長の航海日誌は、兵士の生き残りが持って帰ってきていました。この呪われた島から離れることができる喜びで、乗組員は、一生懸命に働いてくれました。しかし、この島がどれほど呪われているか、本当のことを知るものは、彼らの中にはいません。今度の航海には、いい風が味方してくれました。我々は全速力でこの場所を目指したのです。数日後、宮廷の灯台の火が見えました。全員は喚声をあげ、帰還を祝いました。やっと帰ることができました」

　これが、ドラゴンの月の７日のことだ。
「諸君、これが、現在知り得るすべての情報だ。残念なことに、我が大魔道士の調査によっても、ドラゴン僧侶の話が真実であることは証明された」
　ずっと押し黙られていた皇帝陛下が、ご意見を述べられた。
「諸君は、自ら進んでこの任務を引き受けてくれた。諸君以上にこの任務に適した者は、我が帝国にはいない。帝国のすべてが、諸君の双肩にかかっている。みごと任務を果たし帰還したあかつきには、諸君らに残らず領土を与え、その国の王として迎えよう。失敗した際は、帰還の心配も無用となろう。では任務を伝える。その島に上陸し、そこに留まることに決意した僧侶に会い、第９番目の涙の謎を解くのだ。もしも、我ら人類を代表してドラッケンに話かけるか、または話をせざるを得ぬ場合は、最も深い知恵と知識のある者が……」
　陛下は大きな指輪で重そうな指を私に向けた。
「余の名代として、その任を務める。その者の言葉は、余の言葉と思え。さあ、行け。一刻の猶予もない。帝国海軍の士官用ボートが港に待機している」

　ひとりひとり、陛下の御前で深々と敬礼をすると、我々は荷物をまとめに退出した。私が最後にこの革のバックパックを使ったのは、もう何年前のことになるだろうか。今となっては、あの人の目を盗んではサボってばかりいる召し使いが、きちんとグリスを塗って保管してくれていたと。信じるより他にない。

ドラゴンの月、21日

「……帝国のすべてが、諸君の双肩にかかっている…その島に上陸し、そこに留まることを決意した僧侶に会い、第9番目の涙の謎を解くのだ……」

The Book of Spells
呪文の書

　我らが神秘の道を辿る若き者たちよ、これから述べることを自戒せよ。ここに記したるものは、天より啓示された最古の奥義にして、最高の思慮と分別を持つことによってのみ使用が許される神の技である。それゆえ本書の秘密は、厳格に守られる必要がある。たとえ、これを守る自信がかすかに揺らいだと感じられた場合でも、即刻、本書を破棄すべし。

　長い修行を積んだ者であっても、これらの呪文の響きに対する違和感は、なかなか抜けるものではない。しかし、これらを正確に心に刻み込むことにより、諸君から諸君の弟子へと正確に受け継がれ、さらに、この神の抜を、営々と回り続ける水車のごとく、未来永劫、伝えてゆくことができるのである。

　最後に、不浄の俗人が許可なく本書を開けば、必ず災いが起こると言われている。十分に注意されたい。

メスラトンの大魔道士オフィディオ

ヒール HEAL MINOR

傷を癒す呪文である。ドラゴンの魂を呼び出し、己の魂を捧げ、その偉大なる忍耐力に精神を集中させつつ患者の傷口に手を当てる。そして、ドラゴンの生気を導き出し、ドラゴンの熱い血が患者の体内に流れるよう念じるべし。

非常に少量のエネルギーで、軽い傷ならば十分に治療できる。（Hのキー）

ファイアーボール LIGHTNING

危険な相手に、一瞬にして多大な打撃を与え恐怖心を植え付ける呪文である。

ドラゴンの魂に祈り、その炎の息を体内に飲み込む。全身の力を込めて、手から飲み込んだ炎を放出すべし。狙われた相手は、突然の苦痛に悶え苦しむであろう。効果は大きいが、エネルギーも若干量消費する。魔法の能力を増すごとに、威力も増大する。（1のキー）

シースルー INVISIBLE

己の姿を消す呪文である。ドラゴンの魂を呼び出し、無に意識を集中させて己の肉体をドラゴンの魂と同化せしめるべし。同化に成功したならば、諸君の姿は他人の目には映らなくなる。難易度が高く、エネルギーの消費量も多い。能力の向上にしたがい、成功率も上がる。（Iのキー）

キュアー CURE

病を治療する呪文である。ドラゴンの心臓より生命の力を導き出し、患者に当てることにより、病魔を退散せしめる。

これは、伝染病に感染した場合、体調がすぐれない場合、毒に冒された場合に、効果がある唯一の呪文である。エネルギーの消費量、難易度ともに比較的低く使いやすい。（Cのキー）

ライト LIGHT

人工の明かりを生み出す呪文である。最大限に神経を集中させつつドラゴンに祈り、細心の注意を払い、ドラゴンの炎から微小な明かりのみを取り出すべし。特に初心者は、労多くして実り少ない呪文と感じられるかもしれないが、能力が向上するごとに、この呪文の効果も大きくなる、大変に有用なものである。消費するエネルギーも、非常に少ない。（Lのキー）

パワー STRENGTH

武装した軍隊よりも強い力を発揮するための呪文である。ドラゴンの魂に訴え、強く援護を求め念じるべし。

諸君の攻撃力は倍増され、敵を圧倒する。多量のエネルギーを必要とする。その効果は、能力の向上とともに増大する。（2のキー）

ディフェンス SHIELD

己の身を守る呪文である。敵の強大で鋭い牙の前に、諸君の衣があまりにも貧弱であるとき、ドラゴンに祈り、その堅固なる鱗に身を包まれんことを念じるべし。さすれば、敵のいかなる攻撃にも、かすり傷ひとつ負わずに済むようになる。

エネルギーの消費量はわずかである。効果は、能力の向上にともなって増大する。(Sのキー)

ランゲージ LANGUAGES

すべての方言、言語が理解できるようになる呪文である。この世に理解できぬもののないドラゴンの耳に神経を集中すべし。やがて心は開かれ、あらゆる言葉の意味がわかるようになる。

大変に有用な呪文である。必ず修得すること。(Bのキー)

ヒールメジャー HEAL MAJOR

ヒールと同じ、傷を癒す呪文であるが、重傷の傷のためのものである。精神を統一して、諸君の手を通して、心臓が2回鼓動する間、諸君の体力を患者に与えるべし。エネルギーが大量に消費されるため、比較的危険な呪文であるが、患者の命が救われたときの喜びは、何ものにも代えがたい。

1回では完治しない程重傷の場合は、数回にわたり治療を試みること。(Jのキー)

アンロック UNLOCK

通常の力や道具では開けることのできないドアなどの封印を開放する呪文である。ドラゴンの魂を呼び出し、その尾に触れ、触れた手で開放を拒むものに触れるべし。

封印を行なった者より、諸君の能力が勝っていれば、封印は解かれ開放される。消費するエネルギーは少量だが、効果は大きい。

ひとつ忠告しておくが、私が封印したドアでこの呪文を試そうなどと考えぬこと。私と諸君の力の差は、諸君に極度な危険をもたらし兼ねないからだ。(Uのキー)

アンデッド ANTIMATTER

世の中には、ドラゴンの加護を受けた陽の力では倒すことのできない生物がいる。ドラゴンを否定し、憎悪と怒りを燃え上がらせたときに生じる陰の力に支えられた生物である。彼らは、ドラゴンの陽の力をものともせず、反対にそれを食い物にしてしまう。これは、そのような生物に対抗するための、陰の力を生み出す呪文である。

陰の生物に遭遇すると、体が陰鬱な気分に満たされる。そのときは、死の詩を唱え、反物質の冷気を相手に吹きつけることを念じるべし。

すると、陰の生物は、たちどころに消滅し、永遠にこの世から姿を消す。

消費エネルギーは平均的。魔の力を学ぶ上では、非常に重要な呪文である。

パラライズ PARALYSIS

しばらくの間、動物の動きを封じる呪文である。ドラゴンの目の力を体内に導き入れ、それを諸君の目から放出し、風音に似たグレートウォームの言葉を唱えるべし。
効果は即時現われるが、持続時間は、諸君の体力に比例する。
非常に有用かつ強力な呪文である。いかなる犠牲を払っても、第三者の手にこの呪文が渡らぬよう、注意すべし。また、これは単体の相手にのみ効果がある。相手が複数の場合は、熟考を要す。(4のキー)

ロック LOCK

アンロックの逆を行なう、封印の呪文である。
ドラゴンの魂を呼び出してその尾を結び、それに触れた手で封印したいものに触れるべし。消費エネルギーは、アンロックよりもやや多い程度である。(Vのキー)

ディスペル DISPELL

敵を退散せしめる呪文である。ドラゴンの翼に精神を集中させ、敵に向かって強く羽ばたく様子を念じるべし。効果は、即時、現われる。
比較的多くのエネルギーを消費するが、効果は絶大である。(5のキー)

コンフューズ CONFUSION

敵の心に強い不安を植え付け、自己崩壊に陥れる呪文である。ドラゴンに祈り、勇者も凍りつかせるドラゴンの眼中の炎に精神を集中させる。すると、諸君の眼中に火花が散る。そのときすかさず、狙う敵を見つめ恐怖のマントラを唱えるべし。
狙われた敵は、精神に異常をきたし、自己崩壊を起こす。
エネルギーの消費量は多い。能力が向上するごとに効果も増大する。(6のキー)

スピード SPEED

己の行動速度を速める呪文である。ドラゴンの魂を呼び出し、ドラゴンの汗を集め、それを肢体に強く擦り込むべし。体の動きが速くなる。敵の数が多く、しかも接近された場合などに有効である。
エネルギーの消費量は多いが、能力が向上するごとに効果も増大する。私自身も、この呪文に幾度となく命を救われている。(8のキー)

アイソレーション ISOLATION

敵の目から己の姿を隠す呪文である。ドラゴンの尾から発せられる脅威のオーラに身を浸し、ドラッケンの祭礼の言葉を唱えるべし。
長い時間にわたり、敵は諸君の存在に気がつかなくなる。敵に惑わされたくないときには、非常に有用である。かなりの量のエネルギーを消費するが、効果もそれなりに大きい。(7のキー)

┛V˥F>┛V　リストアー RESTORE

諸君の体から失われた、あらゆる力を取り戻す呪文である。ドラゴンの魂より抽出した生命のエキスを諸君の魂に注ぎ込むべし。完全な体調が蘇る。
消費エネルギーは多いが、効果は大きい。特に、生命力を吸い取る生物に遭遇したときなどは、非常に役に立つ。(Rのキー)

Λ˥>┘<FΛ　アンチマジック ANTI-MAGIC

敵の放った魔法から身を守る呪文である。これは、ドラゴンの魂を呼び出し拒絶するという、矛盾した行動が要求される高度な技である。
呼び出したドラゴンの魂が、聖光を放ちつつ現われたところで、強く暴力的にそれを拒絶すべし。我々はこれを、『ドラゴンの尾に乗る』と言う。
非常に多くのエネルギーを消費し、持続時間も非常に短いが、能力の向上にともなって、効果は増大する。(9のキー)

┛V˥F>┛V　リサレクション RESURRECTION

呪文の中でも、最も劇的な呪文であろう。死亡した同志を蘇らす呪文である。ドラゴンの魂を呼び出し、その心臓に諸君の魂を送り込む。諸君の魂をドラゴンの生命力に浸し、ドラゴンとひとつの魂を形成させる。蘇らせたい同志に精神を集中し、ドラゴンの生命力を彼に放射すべし。そして、奇跡を待て。
非常に多くのエネルギーを消費する。これを修得するまでには、長い時間が必要であろう。(Xのキー)

L┘ΛコΓコV　ブリンドネス BLINDNESS

敵の目を見えなくしてしまう呪文である。ドラゴンの魂の中には、あらゆるものが熔けて消えてしまう暗黒地帯がある。その場所に近づくことを念じ、暗黒地帯が見えてきたら、手を伸ばして暗黒をひと掴み取る。それを敵の目をめがけて投げつけるべし。
敵は闇に取りつかれ、やがて視力を完全に失う。
少ないエネルギーで、大きな効果が得られる呪文である。(0のキー)

FV┘VL>┛　テレポート TELEPORTATION

望む場所へ瞬間的に移動する呪文である。ドラゴンの生命力で諸君の体全体を包み、それを目的地に向けて急激に引き込むよう念じるべし。
大変に多量のエネルギーを消費するので、十分に注意すること。しかし、この上なく便利な呪文である。(Tのキー)

Λ⊐ᒷᒧ>∀ ドラゴンパワー IMPROVATION

ドラゴンの力を借りて経験を積み、ある程度、能力も向上すると、人間としての己の非力さを痛感するときがくる。そのようなときのための、パワーアップの呪文である。

ドラゴンのあらゆる力を諸君の体に導き入れることで、肉体的鍛練を強いることなく、ドラゴンに匹敵する絶大な力を、ひとつの能力に持たせることができるのである。

ただし、あまり頻繁にこれを使用しないこと。非常に多量のエネルギーを消費するのもさることながら、その反動で、パワーアップさせた能力が、子供以下のレベルにまで落ち込んでしまうこともあるからだ。(Dのキー)